

笑庵了悟と晦巖大光

—道元が在宋中に参学した阿育王山の太光長老をめぐつて—

佐藤 秀孝

はじめに

鎌倉初期の貞応二年（南宋の嘉定一六年、一二三三）に日本から入宋求法した永平道元（仏法房、一二〇〇—一二五三）は、明州（浙江省）慶元府鄞県東六〇里の天童山景德禪寺に上山掛搭し、その後、第三二世住持となつた曹洞宗の長翁如浄（浄長、一一六二—一二二七）に随侍し、身心脱落して如浄の法門を嗣続している。日本の嘉禄三年（南宋の宝慶三年、一二二七）に帰国した道元は、やがて越前（福井県）吉田郡志比莊に分け入つて吉祥山永平禪寺を創建し、その法統は現今の日本曹洞宗へと連なっている。道元にとつて在宋中の五年間こそ他に換え難き貴重な参禅学道の時期であつて、その間に得た体験はその後の生涯に決定的な視点を齎している。

ところで、道元自身が『正法眼蔵』『永平広録』その他の著述や語録において、実際に南宋禅林で参学し得た諸刹の長老（住職）として名を挙げている禅者は、きわめて限られているのが実情である。正師と仰いだ如浄は別格として、その他の禅者について道元が如何に伝えているか、簡略に列記して見ることにしたい。

如浄の前住として天童山の第三〇世の住持であつた大慧派の無際了派（一二四九—一二二四）は、入宋した直後の道元が最初に参学の師と仰いだ禅者であり、了派とその会下の人々から道元が受けた影響にはきわめて大きなものが存している。また道元は諸山歴遊した際に台州（浙江省）天台県の天台山中に赴き、黄龍派の明庵荣西（葉上房、千光法師、一一四一—一二二五）ゆかりの禅寺であつた平田万年報恩光孝禅寺を訪れているが、このとき万年寺の住持であつた嗣承未詳（あるいは黄龍派か）の元肅という禅者は手厚く持て成してくれた恩顧の人物にほかならない。このように天童山の了派と万年寺の元肅は入宋して間もない頃の道元にとつて、きわめて好感の持てる存在であつたといつてよい。

これに対して、道元は諸山歴遊の際に温州（浙江省）樂清県に存する北雁蕩山の諸禅刹に立ち寄っており、天童山への帰途には馬祖下の大梅法常（七五二—八三九）ゆかりの明州鄞県の大梅山護聖禅寺にも掛搭しているが、このとき参学したであろう雁蕩山の諸刹や大梅山護聖寺の住持の名はなぜか何も書き残していない。道元の伝記史料である『建撕記』などによれば、道元は諸山歴遊の際に杭州（浙江省）餘杭県の径山興聖万寿禅寺で大慧派の浙翁如琰（仏心禅師、一一五一—一二三五）に謁して問答をなし、台州小翠巖（おそらく台州黄巖県の瑞巖浄土禅院か）でも大慧派の盤山思卓（卓老）に参学したとされるが、道元自身は径山の如琰や小翠巖の思卓らとの関わりについて何も語っていない。

そんな中でいま一人の禅者として道元から名指しで批判される大刹の長老が存している。東浙の名刹として名高い明州（後世の寧波府）鄞県東五〇里の阿育王山広利禅寺の住持を勤めていた大光という長老である。道元は天童山の無際了派や万年寺の元暉に対して批判的な言い回しなどは全く行っていないが、なぜか阿育王山の住持であった大光に対しては厳しい批判のことばを残している。当時、阿育王山といえば、天童山と同じく宰相の史彌遠（字は同叔、魯公、一一六四—一二三三）が嘉定年間（一二〇八—一二二四）に制定したとされる禅宗五山の第五位に列した大刹であり、しかも早くから仏舍利宝塔を祀る霊場として日本にも知られた名刹であったことから、当然ながらすぐれた禅者が選出されて住持職に就任していたはずである。それにも拘わらず、阿育王山の大光は道元にとって宋朝禅批判の対象として悪しき禅者の見本のごとく扱われ、厳しい排斥の矢面に立っている。

この阿育王山の大光については、古来よりその事跡が定かでなく、具体的に如何なる禅者であったのかが曖昧にされてきている。しかしながら、実際に阿育王山の大光について詳しく調べを進めていくと、この人は臨濟宗虎丘派の笑庵了悟（？—一二〇三？）の法を嗣いだ「晦巖大光」ないし「晦岩大光」という名の禅者であったことが判明し、実に天童山の密庵咸傑（中峰、一一八一—一一八六）の法孫に当たっている。『仏果碧巖録』で著名な楊岐派の圓悟克勤（仏果禅師、一〇六三—一一三五）より晦巖大光に至るまでの直系の師資關係を示すならば、

圓悟克勤—虎丘紹隆—応庵曇華—密庵咸傑—笑庵了悟—晦巖大光

という系譜に連なっており、大光は虎丘紹隆（睦睡虎、一〇七七—一一三六）の門流である虎丘派に属している。了悟と大光の師資はともに後世の禅宗史上にほとんど顧みられることのない存在であるが、当時の江南禅林においてはそれなりに著名な立場にあった禅者といつてよい。そこで以下、限られた史料を通してではあるが、本稿では笑庵了悟と晦巖

大光の師資について、その事跡を詳しく追ってみることにしたい。とりわけ、晦巖大光の存在は我が道元が在宋中になした動静とも深く関わっていることから、可能なかぎりその事跡を解明してみたいのである。

宗派図に載る笑庵了悟と晦巖大光

日本の中世禅宗にはいくつかの宗派図が伝存しており、師資相承の系譜が法系図のかたちで記されているが、果して本稿に取り上げる晦巖大光という禅者については如何なる記載が存しているであろうか。本師である笑庵了悟とともに大光の名を載せる比較的古い宗派図について、一通りまとめて見ることにしたい。

破庵派（聖一派祖）の東福円爾（辨円、聖一國師、一一〇二—一一八〇）が南宋禅林から直に将来した東福寺所藏『宗派図』には、虎丘派の「密菴傑禪師」の法嗣の一人に「笑菴悟禪師」の名があり、さらにその法嗣として「晦巖光禪師」の名が書かれている。円爾が入宋した当時、十三世紀前半の江南禅林において、了悟と大光の両禅者の存在がそれなりに高く評価されていたらしいことを窺わしめよう。

同じく破庵派に属する高麗国（朝鮮半島）の無学自超（妙巖尊者、溪月軒、一一二七—一四〇五）が所伝した『仏祖宗派之図』（『韓国仏教全書』第七冊に所収）には「密菴傑禪師」の法嗣の一人に「笑菴悟禪師」の名が存しているものの、「晦巖光禪師」の名は載せられていない。この点は同じ宗派図の所伝と見られる愛知県一宮市の長嶋山妙興寺に伝わる南北朝書写の『仏祖宗派之図』にも「密菴傑禪師」の法嗣の一人に「笑菴悟禪師」の名は存するものの、やはり「晦巖光禪師」の名は載せられていない。

一方、北朝の永徳二年（南朝の弘和二年、一三八二）九月九日（菊節日）に刊行された五島美術館・大東急記念文庫所藏『仏祖正伝宗派図』には「天童密菴成傑」の法嗣の一人に「靈隱笑菴了悟」の名があり、さらにその法嗣に「天童晦岩大光」の名が記されている。また夢窓派の古篆周印が室町中期の十五世紀前半に編集した『仏祖宗派図』にも「天童密菴成傑」の法嗣の一人に「靈隱笑菴了悟」の名があり、了悟の法嗣に「天童晦岩大光」の名が記されている。

江戸期の宗派図としても、江戸中期に洛（京都）藏春庵の深江元彬（文水）が編纂した『掌珠宗派図』には「天童密庵成傑」の法嗣の一人に「灵隱笑庵了悟」の名があり、了悟の法嗣として「天童晦岩大光」の名が見られる。江戸初期に大応派（妙心寺派）の桂芳全久が編集した『正誤仏祖正伝宗派図』四にも「天童密菴成傑」の法嗣に「靈隱笑菴了悟」

の名があり、了悟の法嗣として「天童晦岩大光」の名が載せられている。また享保五年（一七二〇）五月に和泉（大阪府）堺の仏在禅庵で大応派（大徳寺派）の仲敬慧慎が編集した『伝燈歴世譜』巻中「虎丘下世譜」にも「明州天童密菴咸傑」の法嗣の一人に「杭州靈隱笑菴了悟」の名があり、了悟の唯一の法嗣として「天童晦巖大光」の名が記されている。³

このように南宋後期や日本の中世から近世に編纂された宗派図のいくつかに「笑菴悟禪師」ないし「靈隱笑菴了悟」の法嗣として「晦巖光禪師」または「天童晦岩大光」の名が載せられていることから、了悟と大光の両者の存在は日本の中世禅林にもそれなりに知られていたものと見られる。いずれにせよ、これらによって、虎丘派の密庵咸傑の法を嗣いだ高弟の一人に笑庵了悟という禅者が存し、さらに了悟にとつて唯一の嗣法門人として晦巖大光という禅者が活動していたことが窺われる。

笑庵了悟の伝記記事

はじめに晦巖大光の本師である笑庵了悟という禅者について、その事跡を追ってみることにしたい。明代初期に編纂された『続伝燈録』巻三五「目錄」には「天童傑禪師法嗣」として「靈隱了悟禪師」と名のみ記されており、上堂語などは見録されていない。同じく明代初期に編纂された『増集続伝燈録』巻二「杭州靈隱笑庵了悟禪師」の章には、

杭州靈隱笑庵了悟禪師、姑蘇人。上堂拏、睦州因僧問、以二重去二重、即不問、不下以二重去中一重、時如何。睦州曰、昨日栽茄子、今日種冬瓜。師頌曰、昨日栽茄子、今日種冬瓜、一声河滿子、和月落誰家。

として見録立伝されているが、わずかに出身地が姑蘇すなわち蘇州（江蘇省）であつた点と、上堂語一つを載せるのみであつて、密庵咸傑の法を嗣いで杭州（浙江省）錢塘県の北山景德靈隱禪寺に住持したことが知られるにすぎない。しかもこの上堂は実際には「睦州一重」の古則に対して了悟が詠じた五言四句の頌古を上堂のごとく改めたものであり、『増集続伝燈録』の了悟の章には、この一頌が収録されるのみである。

こうした禅宗燈史の簡略な記載に対し、黄龍派の塗毒智策（塗毒とも、一一一七—一一九二）の法嗣である古月道融が慶元三年（一一九七）に自序を付した『叢林盛事』巻下には「笑庵悟禪師」の項が存しており、

笑菴悟、蘇之常熟人。弃俗出家、初見無菴全、後見密菴于衢之烏巨。淳熙間、首衆於冷泉、專以「供養」為心。時歲大飢、密菴持盃未レ回、知事約「東方來」。悟坐「在山門」、一例放入。泊「密菴回」、知事沮レ之。密菴見悟、似「不」悅。因辞云、有「下」但

得_レ院子如_レ揲大、尽_レ情供_レ養五湖僧_一之句。不_レ逾_レ時、住_レ衢祥符、歴_レ董数刹、果以_レ供養_レ為_レ務。

とあつて、若干ながら了悟に関する伝記的な記事が語られている。同時代を生きた道融の伝えるところであるだけに、了悟の出身地や参学した過程の一端が知られる点で貴重な内容といえるだろう。とりわけ、慶元三年より以前の時点で、了悟がすでに数刹の住持を歴任していたことを伝えているのは注目される。

また大慧派の偃溪広聞（仏智禪師、一一八九—一二六三）の法嗣である枯崖円悟が南宋末期に編集した『枯崖和尚漫録』巻中にも「笑庵悟禪師」の項が存しており、

笑庵悟禪師、周氏居_レ蘇之常熟。久侍_レ三才無等、復与_レ三松源、同扣_レ三密庵。密庵曰、爾平生見処、試語_レ我来。随通_レ三所見。曰、未在_レ参堂去。笑庵後於_レ僧堂中、見_レ剔_レ燈省悟。室中横機無_レ所讓。頌_レ徳山入_レ門便棒_一云、倒_レ嶽傾_レ湫与_レ麼来、小根魔子謾疑猜、神駒一躍_レ三千界、空説門前下馬臺。密庵聞而喜。昔松源在_レ衆時、疎_レ於_レ世事。笑庵微細皆任_レ責。及_レ源住_レ三靈隱、庵在_レ三里之靈巖、具_レ舟抵_レ杭、訪_レ之到_レ門。三日方得_レ相見、無_レ慚色。後源赴_レ法華招、又以_レ三靈隱_一力举_レ自代。前輩所見、異_レ於_レ流俗、与_レ今人_一一語或訛終_レ身為_レ恨者、大有_レ三逕庭_一也。併書此為_レ三後來龜鑑_一。

とあつて、いまし詳しい了悟の事跡が伝えられている。円悟も南宋末期の禪者であり、了悟が逝去して半世紀ほどしか隔ていない時期の記事であるだけに貴重な内容といつてよい。惜しむらくは円悟が了悟の法を嗣いだ晦巖大光に関して何も書き残していないことであり、何らかの情報を書き足していたならば、大光についても興味深い事跡が知られたはずであろう。いずれにせよ、このように『叢林盛事』と『枯崖和尚漫録』の記載内容を併せ考察することにより、ある程度は了悟の事跡が判明するわけである。

了悟の参学について

笑庵了悟の出身地に関して『増集続伝燈録』は姑蘇の人すなわち蘇州の出身であったことを伝えている。さらに『叢林盛事』や『枯崖和尚漫録』によつて、了悟が詳しくは蘇州常熟県の出身であったことが記されている。しかも『枯崖和尚漫録』によれば、俗姓を周氏と伝えているから、了悟は蘇州常熟県の周氏に生を受けたことが判明する。常熟県は蘇州内の一県であつて古くは南沙県と称され、唐代以降に常熟県と改名されている。蘇州は中心地に府城を囲んで長洲県と吳県が位置し、南には吳江県があり、東には崑山県が存し、北には常熟県が位置しているのであつて、常熟県の北

側を長江（揚子江）が西から東へと流れている。

了悟というのはこの人の法諱であり、道号は笑庵または笑菴あるいは咲庵とも称している。いうまでもなく笑庵了悟という名称は「笑」と「悟」の関連からして、釈迦牟尼仏と西天第一祖の摩訶迦葉との間で交わされた「世尊拈華微笑」の古則公案に因んだ発想であり、「咲」という語も「笑」と同じく笑う意である。当時、南宋禪林で道号に「笑」の一字を用いた禪者としては、了悟より一世代遅れて大慧派に笑翁妙堪（一一七七一—二四八）がおり、この人は了悟の法嗣である晦巖大光とほぼ同世代に当たっている。また元代後期にも同じ大慧派に笑隱大訥（蒲室、広智全悟大禪師、一二八四—一三四四）がおり、この人の詩文集である『蒲室集』一五巻は広く日本の中世禪林に受容されている。妙堪の場合は「堪笑（笑うに堪えたり）」の語に因み、大訥の場合は「訥笑（訥び笑う）」の語に因んでいる。

了悟が如何なる事情で出家得度したのかは定かでないが、『叢林盛事』によれば「俗を弃てて出家し、初めに無菴全に見ゆ」と記されていることから、おそらく蘇州常熟県内の寺院で世俗を捨てて出家剃髪し、具足戒を受けて後、了悟は初めに楊岐派の無庵法全（一一一四—一六九）に相見したことが知られる。法全は楊岐派の蓬庵端裕（仏智禪師・大悟禪師、一〇八五—一一五〇）の法を嗣いだ高弟であり、撫州（江西省）宜黄県の臺山や撫州臨川県の白楊禪院に住持している。その後、法全は隆興元年（一一六三）に湖州（浙江省）烏程県の道場山護聖万寿禪寺（虎巖）に化導を敷いているから、おそらく了悟は蘇州からほど近い湖州に赴いて道場山で法全に参学したものと推測される。

一方、『枯崖和尚漫録』には「久しく才無等に侍す」と記されているから、了悟は久しく大慧派の無等有才（一一六一—一一六九）にも随侍したことが知られる。有才は大慧派祖の大慧宗杲（妙喜、大慧普覚禪師、一〇八九—一一六三）に参じて法を嗣ぎ、諸刹に住持した後、紹興三年（一一六一）に蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺に遷り、さらに同門の大禅了明（？—一一六五）の後席を継いで乾道元年（一一六五）に杭州餘杭県西北五〇里の径山能仁禪院（後の興聖万寿禪寺）に第二世として住持している。おそらく了悟は初めに湖州の道場山で無庵法全に参学した後、湖州に隣接する杭州餘杭県に到り、径山に上山して無等有才に随侍し、有才のもとで久しく研鑽に努めたものと推測される。

この点、『渭南文集』巻四〇「塔銘」に載る「松源禪師塔銘」や『松源和尚語録』巻末所収「塔銘」では定かでないが、『松源和尚語録』の冒頭に載る汲郡の孟猷（字は良甫、一一五六—一二二六）の後序によれば、

一日留_二道場全_一席下_一、_二藁有_二所得_一、_二疑網_二尽除_一。時全公縁化出_レ外教数日而后反。亟欲_レ求_レ証、先_レ衆入室。于_レ時全公機鋒不_レ

轉。松源嘗言而出、即挑_レ包過_レ鳳口_一謁_二密菴_一。未_レ及_レ語、密菴云、且喜大事明了、吐露即不_レ堪。松源於_レ是帰堂憩息。其去_二道場_一也。有_二偈云、当头一著没_二諍訛_一、去住還如_二水上波_一、有意氣一時添_二意氣_一、從教平地起_二干戈_一。

という記事が存している。これは後に了悟と同門になった松源崇嶽（崇岳とも、老贖翁、一一三二—一二〇三）が湖州の道場山で無庵法全に参じて何らかの機縁が存したことを伝えるものであり、このとき崇嶽は道場山の法全のもとで了悟とも知り合つたことなるう。ただし、このとき崇嶽は悟るところが存したものの、法全の意図を真に読み取れず、その門を去つたことが伝えられており、後に密庵咸傑の席下に投じて自らの非に気づくことになる。

密庵咸傑への随侍と悟道の機縁

その後、了悟は松源崇嶽とともに衢州（浙江省）西安県南三五里の西烏巨山乾明禪院において虎丘派の密庵咸傑の門を叩いたことが知られる。『密菴和尚語録』卷上「密菴和尚住衢州西烏巨山乾明禪院語録」によれば、咸傑は乾道三年（一一六七）に烏巨山に入寺しているから、両者はそれ以降に咸傑のもとに入門していることなるう。『枯崖和尚漫録』卷中「笑庵悟禪師」の項には、了悟が咸傑に参学してまもない頃になしたと見られる問答として、

密庵曰く、「爾が平生の見処、試みに我れに語り来たれ」と。随いて所見を通ず。曰く、「未在、参堂し去れ」と。笑庵、後に僧堂中に於いて燈を剔るを見て省悟す。室中の横機、讓る所無し。「徳山、門に入れば便ち棒す」を頌して云く、「嶽を倒し湫を傾けて与麼に來たり、小根の魔子、謾りに疑猜す。神駒一たび躍る三千界、空しく説く門前の下馬臺」と。密庵、聞いて喜ぶ。昔し松源、衆に在りし時、世事に疎きなり。笑庵は微細にして皆な責に任ず。

という機縁が伝えられている。あるとき咸傑が了悟に対して平生の見処を試みに述べてみるように促し、これに応じて了悟は自らの心境を咸傑に申し述べている。ところが、咸傑は了悟のありようをいまだ認めず、さらに参学して研鑽に努めるように諭すのである。そのため了悟は僧堂において坐禪辦道に一段と精進し、僧堂の燈火を消すさまを見て悟るところが存したとされ、それ以来、咸傑の室中における商量は他の禪者らを凌駕し、何ら讓るところがなかったとされる。『枯崖和尚漫録』には青原下の徳山宣鑑（見性大師、周金剛、七八〇—八六五）にちなむ「徳山棒」の古則に対して了悟が詠じた七言四句の頌古が載せられており、これを聞いた咸傑が満足して喜んださまが伝えられている。『枯崖和尚漫録』の記載で興味深いのは、崇嶽と了悟の性格の相違が特徴的に語られている点であるう。修行時代に世事に疎かつた崇嶽

に對して、了悟はきめ細かい性格であつたことから多くの職位を無難に執り行なつたものらしい。

衢州の西鳥巨山とは、衢州西安県南三五里の西鳥巨山乾明禪院のことであり、北宋の端拱元年（九八八）に雪峰派下の鳥巨儀晏（開明禪師、八七六—九九〇）が開山始祖となつてゐる。密庵咸傑が住持する以前には、楊岐派の雪堂道行（一〇八九—一一五二）や曹洞宗宏智派の鳥巨正光（俗名は呉叙）らが鳥巨山に住持してゐる。

『松源和尚語録』卷下「偈頌」には、鳥巨山の咸傑のもとで蔵主を勤めていた了悟に関わる記事として、

送_三悟蔵主還_二姑蘇_一（靈隱笑庵和尚、時在西鳥巨山）。

玲瓏巖畔瞥不_レ瞥、豎_三起脊梁_一。生鉄槩。無_レ端林下錯商量、携_レ手相隨入_二虎穴_一。甕裏驀然失_二却繁_一、箇事明明向_レ誰說。彼時只是此時人、誰知眼裏重添_レ屑。我携_二拄杖_一奔_二南北_一、君入_二西山_一恣_レ輕忽。放下蛇頭_一捋_二虎鬚_一、翻_レ身便作_二自拈賊_一。太虛全布目前機、生殺交馳誰敢窺。我來一笑重相見、鼻孔由来向_レ下垂。密庵家風徹骨貧、密庵有_レ眼且無_レ筋、將_レ無作_レ有這些子、透_二這些子_一能幾人。西風落_レ木天宇迥、君兮不_レ住_二別峰頂_一、曹谿一滴杖頭挑、漲起吳江千万頃。

という偈頌が載せられている。久しく肩を並べて坐禪辦道に明け暮れ、修行を共にした了悟が西鳥巨山の咸傑のもとで蔵主を勤めていたが、何らかの理由で姑蘇すなわち郷里の蘇州に帰ることが存したものである。この偈頌からしても、崇嶽がまだ諸方に行脚していた頃、了悟も修行に励んでいたことが窺われ、両者がともに深く咸傑の禅旨を相承していたことが知られる。悟蔵主の注記として「靈隱の笑庵和尚、時に西鳥巨山に在り」とあるのは、崇嶽が示寂した直後に了悟が後席を継いで靈隱寺に住持し、その頃に『松源和尚語録』二巻が編纂されていたことに依るものである。

しかも『密菴和尚語録』は概ね「參学小師崇岳・了悟等編」とあるから、崇嶽と了悟の両者が參学小師の肩書きで編集したものであることが知られる。おそらく両者は深い道交によつて結ばれ、ともに咸傑より全面的信頼を得ていたのであつて、互いの長所を存分に活かし、欠点を補い合つて仏道修行に邁進し、師匠咸傑の語録を編纂してまとめ上げているものである。このため『密菴和尚語録』卷末「塔銘」には「其他嗣法者数十輩、而了悟・崇岳尤傑然者也」とあり、咸傑に多くの嗣法門人が存した中であつて、同門の破庵祖先（一一三六—一二二二）や曹源道生（？—一一九七）らを差し置いて、了悟は崇嶽とともに密庵門下を代表する高弟として位置づけられている。

さらに『叢林盛事』卷下「咲庵悟禪師」の項には、了悟が靈隱寺の首座を勤めていたときの逸話として、

淳熙の間、衆に冷泉に首たり、専ら供養を以て心と為す。時に歳大いに飢え、密菴持盃して未だ回らず、知事、方來を約束す。悟、

山門に坐在して、一例に放入す。密菴の回るに泊んで、知事、之れを沮む。密菴、悟を見て、悦ばざるに似たり。因りて辞して云く、「但だ院子の揀大の如きを得ば、情を尽くして五湖の僧を供養せん」の句有り。時を逾えずして、衢の祥符に住し、数刹を歴董して、果して供養を以て務めと為す。

という記事が伝えられている。了悟は淳熙年間（一一七四—一一八九）に冷泉すなわち靈隱寺において成傑のもとで首座に就いており、専ら修行僧に供養することを心掛けていたとされる。あるとき飢饉のため成傑が食糧の勸募をなすべく諸地に行乞していた際に、知事（維那か）は修行僧の入門掛搭を差し控えていたが、首座の了悟は山門に坐して掛搭志願者をすべて僧堂内に送り込んでしまう。成傑が帰山するに及んで、知事の僧は了悟の行為を阻止しようとし、成傑も了悟の取った行動に対して快く思わなかったとされる。このため了悟は四海五湖の修行僧に情を尽くして供養する心根を「但得三院子如三揀大、尽レ情供三養五湖僧」という七言二句の偈頌に認めて成傑に呈したのである。了悟は諸刹の住持となつて後もこのときの思いを貫き通し、修行僧への供養を自らの務めとなして精進したと伝えられる。この逸話は了悟の人となりを窺う上で興味深く、若き修行僧らに対する慈悲心に満ちた接化指導のありようが偲ばれる。

ところで、『禅林宝訓』（『禅門宝訓集』とも）巻四の「密菴傑和尚」の項（大正蔵四八・一〇三七c）に、

密菴謂「悟首座」曰、叢林中、惟浙人輕懦少レ立。子之才器宏大、量度淵容、志尚二端確、加以見地穩密。他日未レ易言、但自韜晦、無レ露二圭角、毀レ方瓦合、持以二中道。勿下為二勢利、少枉上、即是レ不レ出二塵勞、而作二仏事也。〈与二笑菴一書〉。

という法語が収録されており、成傑が首座の了悟に付与した短編の法語が載せられている。いま便宜上、成傑が了悟に示した法語の部分のみを書き下してみるならば、

叢林中、惟だ浙の人は輕懦にして立つこと少なし。子が才器は宏大にして、量度は淵容なり、志しは端確を尚び、加うるに見地は穩密なり。他日は未だ言うに易からず、但だ自ら韜晦して圭角を露わすこと無く、方を毀ちて瓦合し、持するに中道を以てせよ。勢利の爲めに少しも枉ぐること勿かれ、即ち是れ塵勞を出でずして仏事を作すなり。

といった具合になろう。この「笑菴に与うる書」の法語では、冒頭に浙僧すなわち浙江出身の僧たちの気性が軟弱であることを語っているが、成傑自身は福建出身の閩僧であり、了悟は江蘇出身の呉僧であるから、いずれもこの範疇に属していないことになる。ついで成傑は了悟が才氣に恵まれ、度量も奥深いことを称えており、志しも真直ぐで修行の見処も平らかであることを述べている。しかしながら、後半で成傑は後日の忠告として、才智を表に出さずに包み隠し、

角を立てずに相手と歩調を合わせ、中道の精神で身を律していくことを了悟に求めている。これは了悟の性格を十分に踏まえた上での説示と見られ、末尾には権勢や利益に振り回されず、世俗の煩惱の真直中であつて仏法を行じていくべきことを論じている。

南宋末元初に活躍した破庵派の絶岸可湘（一一〇六—一二九〇）の語録である『絶岸和尚語録』「跋」には、

密庵授「笑庵」法語、齊侍者求。

世尊有「密語」、迦葉不「覆藏」。一的相承、甚「於疊毒」、到「其家」者、水可「飲」乎。然密庵而有「笑庵」、猶「三世尊」而有「迦葉」。笑顏一破、密語乖張、直「下子孫」、無「計」遮掩。思齊侍者、對「予告」評。故拋「歎」而結云。

という跋文が収められている。可湘は密庵咸傑—破庵祖先—無準師範—絶岸可湘と次第する禪者で、破庵派の無準師範の法を嗣いだ高弟の一人であるから、了悟は可湘にとつて法統の曾伯父に当たっている。この跋文は可湘が会下で侍者を勤めていた思齊という禪者の求めに応じて記したものであるが、ここにいう「密庵授「笑庵」法語」とは、おそらく先の「与「笑庵」書」と同一の墨蹟のことであろう。したがつて、咸傑が了悟に与えた墨蹟はその後も一世紀近く諸禪者の間を転々として侍者思齊のもとに伝えられ、思齊は親しく可湘に跋文を依頼しているわけである。跋文において可湘は世尊（釈尊）の密語と摩訶迦葉の破顔微笑という「世尊拈華」ないし「破顔微笑」の古則に因んで、密庵咸傑と笑庵了悟の師資を称えているのであり、世尊の密語は密庵咸傑を意味し、摩訶迦葉の破顔微笑は笑庵了悟に準えられている。思齊が如何なる禪者であつたのかは定かでないが、仮に思齊が了悟にとつて直下の法統の子孫であつたとすれば、あるいは晦巖大光の法嗣ないし法孫であつた可能性も存しよう。

開堂出世から靈隱寺住持へ

ところで、『叢林盛事』卷下「咲庵悟禪師」の項によれば「衢の祥符に住し、数利を歴董す」とあることから、了悟は咸傑の生前中には衢州（浙江省）西安県治北の大中祥符禪寺に開堂出世し、その後もいくつかの寺院を歴住していることが知られる。『康熙衢州府志』卷二六「寺觀考」の「西安県」の「祥符禪寺」の項によれば、

祥符禪寺、在「三県治北」。梁天監三年、額曰「鄭覺」。旧伝為「將軍鄭平捨」宅故名。唐陸宣公贄、捐「助田千餘畝」、以飯「僧衆」。

至「今」禮「鄭陸両公」、供「于左廡」。至「宋」大中祥符初、改「今名」矣。

とあり、衢州の祥符寺についてその変遷を伝えている。この寺は古く梁の天監三年（五〇四）に鄭覺寺として建立された衢州の古刹として知られ、北宋の大中祥符年間（一〇〇八—一〇一六）の初めに大中祥符禪寺と改められている。

しかも『密菴和尚語録』巻上に参学小師崇岳・了悟等編『衢州大中祥符禪寺語録』が収められていることから、了悟は本師の咸傑が住持した衢州の大中祥符寺に門下として後席を継ぐようなかたちで入院開堂しているものである。また『密菴和尚語録』の冒頭には参学居士であつた張鑑（字は功甫、号は約齋、一一五三—？）が咸傑の語録に序文を寄せて、

密菴禪師示寂之三年、其得法真子、住_二靈巖_一了悟、以_二老師平生語_一編、属_二鑑作_レ序。鑑切謂、老師一見_二応菴_一、便明_二大法_一、破沙盆語、盛播_二叢林_一、此無_二可_レ序者_一。七鎮_二名山_一、道滿_二天下_一、一時龍象、尽出_二鉗鎚_一、此亦無_二可_レ序者_一。入_二対中宸_一、闡_二揚般若_一、深契_二上意_一、益光_二宗門_一、此亦無_二可_レ序者_一。然鑑叨承_二衣付_一、義不_レ容_レ默、謹為_レ之序曰、密菴語録二卷、総八十七板、板二十行、行二十字。若於_レ此薦得、許_二親見_一密菴。如或未_レ然、聽_二取一_レ転語。

淳熙十五年冬仲月九日、参学張鑑序。

と書き残している。張鑑がなした序文の本文のみを書き下してみれば、つぎのごとくなる。

密菴禪師示寂するの三年、其の得法の真子、靈巖に住する了悟、老師の平生の語一編を以て、鑑に序を作さんことを属む。鑑切に謂えらく、「老師は一たび応菴に見えて、便ち大法を明らめ、破沙盆の語、盛んに叢林に播けり、此に序すべき者無し。七たび名山を鎮し、道は天下に満ち、一時の龍象、尽く鉗鎚より出づ、此に亦た序すべき者無し。中宸に入対して、般若を闡揚し、深く上意に契い、益ます宗門を光かせり、此に亦た序すべき者無し」と。然して鑑、叨くも衣付を承け、義ありて黙す容からず、謹んで之れが為めに序して曰く、「密菴語録二卷、総べて八十七板、板二十行、行二十字なり。若し此に於いて薦得せば、親しく密菴に見えしことを許さん。如或し未だ然らずんば、一転語を聴取せよ」と。

咸傑が淳熙一三年（一一八六）六月に示寂して三年目に当たる淳熙一五年（一一八八）に、了悟は『密菴和尚語録』二巻を携えて親しく咸傑に参学した居士であつた張鑑のもとを訪ねており、語録の冒頭に序文を寄せてほしい旨を依頼している。このときの肩書きとして「靈巖に住する了悟」とあるから、咸傑亡き後に了悟は靈巖寺という寺に住持していたことが知られる。了悟が住持した靈巖寺とは、状況的に蘇州（江蘇省）呉県西三〇里の靈巖山頭親崇報禪院（靈巖寺）のことを指している。靈巖寺の了悟から親しく依頼を受けた張鑑は、淳熙一五年一月九日に『密菴和尚語録』の序文を撰しているわけである。このように了悟は同門の崇嶽とともに『密菴和尚語録』を編集し、さらに靈巖寺住持の身で

その語録の刊行にも尽力して張鑑の序文を得ており、これを完遂していることが知られる。了悟の活動なくして『密菴和尚語録』は後世に残されることはなかったわけであり、その面でもこの人の隠れた功績には同門の崇嶽以上に大きなものが存したといわねばならない。

了悟が蘇州靈巖寺に住持していた期間が何時までであったのかは定かでないが、その後、同じ蘇州崑山県治東南に存した薦巖資福禪寺にも住持していたものらしい。了悟は一〇数年の久しきにわたり郷里蘇州地内の禪刹を中心に化導を敷いていたことになり、おそらくこの間に晦巖大光も靈巖寺や薦巖寺において了悟の接化を受け、參禅學道に努めたものと推測される。最晩年に至つて、やがて了悟は杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺に住持する因縁に恵まれている。『扶桑五山記』一「靈隱住持位次」によれば、了悟の前後の住持について、つぎのように記している。

廿三、松源岳禪師。廿四、笑庵悟禪師。廿五、息菴觀禪師。

了悟は崇嶽の後席を継いで靈隱寺の第二四世に就任していることが知られる。ただし、『靈隱寺志』卷三下「住持禪祖」の「笑菴了悟禪師」の項では伝記的な記述としては単に「臨濟宗、姑蘇人、天童杰法嗣」と記されるのみで、世代や住持期などは何ら定かでない。ここに「天童杰」とあるのは「天童傑」のことであり、了悟が天童山の密菴成傑の法を嗣いだ高弟である意にほかならない。『松源和尚語録』卷下「臨安府景德靈隱禪寺語録」や陸游撰「松源禪師塔銘」などによれば、崇嶽が靈隱寺に陞住したのは慶元三年（一一九七）六月五日のことであり、六年間にわたつて住持したとされるから、嘉泰二年（一二〇二）八月四日に示寂するまで現住であつたものらしく、『松源和尚語録』卷下「開山頭親報慈禪寺語録」によれば、この間に崇嶽は杭州地内に存したと見られる頭親報慈禪寺の開山始祖にも拝請されている。

一方、松源派の沢山式威が元代中期に編纂した『禪林備用清規』卷四「西堂頭首受請陞座」の項には、

掩室受請、松源引座、松源受請、笑庵引座、皆不_レ奉話。簡堂受請、石橋引座、淳庵受請、息庵引座、皆奉話。

という記載が存している。これは西堂位や頭首位にある禪者が請を受けて陞座する際に古人の話を取り上げて拈提する奉話をなすか否かを述べた一段であるが、掩室善開が請を受けて出世した際には本師の松源崇嶽が引座をなし、それ以前に崇嶽が請を受けて出世したときには同門の笑庵了悟が引座をなしたが、崇嶽や善開の場合には奉話が行なわれなかつたと述べている。一方、楊岐派の簡堂行機（一一三一—一一八〇）が請を受けて出世した際には法從弟に当たる同じ楊岐派の石橋可宣（仏日禪師、？—一二二七）が引座をなし、楊岐派の淳庵善浄が請を受けて出世した際には本師であ

る息庵達観（一一三八—一二二二）が引座をなしたとし、行機や善浄の場合には拳話が存したことを伝えている。いずれにせよ、『禪林備用清規』の記述は、了悟と崇嶽の関わりがきわめて親密であったことを伝える逸話であり、両者が生涯にわたって深い道交で結ばれていた事実を知ることができよう。

ところで、いま一つ興味深いのは同門の法弟に当たる破庵祖先が靈隱寺の了悟のもとで首座に就いていることである。祖先はいま一つ興味深いのは同門の法弟にも多大の影響を及ぼした無準師範（仏鑑禪師、一一七七一—一二四九）の本師に当たっている。『破菴和尚語録』巻末に付される宗性編「行状」によれば、祖先は密庵咸傑の法を嗣いで後、夔州府（四川省）奉節県の臥龍山咸平禪院に住持しているが、その記事につづいて、

留三年出_レ峽、至_二常州華藏_一、遯菴演始延_レ師分座立僧、衆皆傾服。至_二於金山退菴奇_一・靈隱笑菴悟_一・徑山蒙菴聰_一、師至必延居_二第一座_一、衆輒倍_レ常。

という記載が存している。これによれば、祖先は咸平禪院に住すること三年にして、再び三峽を下って江浙に到り、常州（江蘇省）無錫県の華藏褒忠禪寺において大慧下の遯庵宗演のもとで首座として分座説法している。その後、鎮江府（江蘇省）丹徒県の金山龍游禪寺で楊岐派の退庵道奇に、杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺で了悟に、さらに杭州餘杭県の徑山興聖万寿禪寺で楊岐派の蒙庵元聰（蒙叟、仏智禪師、一一三六一—一二〇九）に招かれ、それぞれの禅刹で首座（第一座）を勤めている。了悟と祖先は同門ではあるが、おそらく了悟の方が年齢的にも法兄であったものと見られ、法弟の祖先を首座に招いて接化を補助せしめているわけである。

了悟が示寂したのが何時であったのか、世寿・法臘が何歳であったのかも定かでないが、その後席を継いで靈隱寺の第二五世に就任したのは、先に触れた楊岐派の息庵達観にはかならない。達観については幸いに『北磻文集』卷一〇「塔銘」に「天童山息庵禪師塔銘」が収められており、若干ながら事跡が知られている。達観は婺州（浙江省）義烏県の趙氏の出身であり、同県内の法惠寺の正覚のもとで出家して後、明州天童山の応庵曇華や湖州道場山の無庵法全に参じているから、その間に崇嶽や了悟とも交遊が存したものであろう。その後、達観は台州天台北五〇里の天封禪寺に赴いて楊岐派の水庵師一（一一〇七一—一一七六）のもとに投じて法を嗣いでいる。「天童山息庵禪師塔銘」によれば、

即去至_二龍翔_一、栢堂虛_二第一座_一以俟。識者偉_二栢堂知_レ人_一。開_二法嚴之靈岩_一、閱_二四五利_一。晚自_二金山_一被_レ旨、靈隱坐_二三四夏_一。用_二大覺故事_一、上告_レ老之請、歸_二天童_一、又六夏而蛻。嘉定五年七月二十七日也。臘五十、寿七十五。

とその後の活動が記されている。達観は嘉定五年（一一二二）七月二十七日に世寿七五歳で示寂しているが、晩年の一〇年間の中で、前半の四年間を靈隠寺に住持し、後半の六年間を天童山に住持したとされ、夏安居四回を靈隠寺で過ごし、六回を天童山で過ごしたことになる。六回を靈隠寺に入寺したのは嘉泰三年（一一一三）夏安居以前であつたものと解される。したがって、了悟が靈隠寺の住持を退いたか示寂したのも嘉泰三年の夏安居以前ということになり、おそらく同門の崇嶽に遅れること僅か一年あまりにして嘉泰三年の春頃に了悟も示寂したのではないかと推測される。崇嶽は世寿七一歳で示寂しているが、おそらく了悟もほぼ同年代であつたものと見られるから、世寿七〇歳前後には達していたはずであろう。了悟の墓塔が何れの寺院に立てられたのかは定かでないが、おそらく靈隠寺の一角それも同門の松源崇嶽の墓塔が存した鷲峰庵（松源塔下）の近隣に立石されたのではないかと推測される。

『笑菴悟和尚語』の上堂と偈頌

嘉熙二年（一一三二）に晦室師明が編集した『統開古尊宿語要』第四集には短編ながら『笑菴悟和尚語』が収められており、了悟の生前のことばが伝えられている。『笑菴悟和尚語』には冒頭に「笑菴悟和尚語、嗣「密菴」と表題が記された後、初めに「上堂」の部分が存しており、以下、煩瑣ながら全文とその書き下しを示しておきたい。

(1) 院主請「葉山」為「衆上堂」。衆纒集、山便帰「方丈」。院主白云、「和尚既許」為「衆説」禪、因「甚一言不」措。山云、「經有」經師、「論有」論師、「争怪」得老僧。師云、「克由」耐耐、「一人為」衆竭「力」、禍出「私門」、一人命若「懸絲」、死而不「弔」。祥符門下、令不「虚行」。當時若見、掘「箇深坑」、一時埋却。遂回「顧侍者」云、「侍者還」甘麼。侍者擬議。師喝云、「將」頭不「猛」、累及「三軍」。

挙す。院主、葉山を請して衆の爲めに上堂せしむ。衆纒かに集まるに、山便ち方丈に帰る。院主白して云く、「和尚、既に衆の爲めに禪を説くことを許す、甚に因つてか一言も措かざる」と。山云く、「經に經師有り、論に論師有り、争でか老僧を怪しみ得ん」と。師云く、「克由耐耐、一人は衆の爲めに力を竭す、禍は私門より出づ。一人は命は懸絲の若し、死して弔わず。祥符門下、令は虚しく行なわれず。當時若し見ば、箇の深坑を掘り、一時に埋却せん」と。遂に侍者を回顧して云く、「侍者、還た甘きや」と。侍者、擬議す。師喝して云く、「頭を將いること猛からざれば、累いは三軍に及ばん」と。

(2) 山僧夜来得「箇夢」、夢見「三教聖人」、各説「一段禪」。孔夫子道、生而知「之者上」也、学而知「之者次」也。山僧向「他道」、之乎者也、字經「三写」。李老君道、恍恍惚惚、其中有「物」、杳杳冥冥、其中有「精」。山僧向「他道」、求「生不」得「生」、求「死不」得「死」。未

後黄面老子道、未_レ離_二兜率_一、已降_二王宮_一、未_レ出_二母胎_一、度_レ人已畢。山僧去_二他耳埵_一、輕輕向_レ他道、少壳弄。忽然雲門・趙州・徳山・臨濟・法眼・曹洞・滙仰開得、簇簇上来、棒喝交馳、君臣父子、透_レ声透_レ色、截_二断衆流_一、卓然而立。三教聖人纔見、懾羅而退。山僧豁_二開眼_一来、元来是大宋国内、崑山県中、資福刹竿頭上、展_二家風_一、善法堂前、龍蛇混雜。遂召_二大衆_一云、且道、夜来夢底是、今朝説底是。喝一喝云、是汝諸人、眼在_二什麼處_一。

「山僧、夜来、箇の夢を得たり、夢に三教の聖人を見るに、各おの一段の禪を説く。孔夫子道く、『生まれながらに之れを知る者は上なり、学びて之れを知る者は次なり』と。山僧、他に向かつて道えり、『之乎者也、字は三たび写すを経たり』と。李老君道く、『恍恍惚惚として、其の中に物有り、杳杳冥冥として、其の中に精有り』と。山僧、他に向かつて道えり、『生を求むるも生を得ず、死を求むるも死を得ず』と。末後に黄面老子道く、『未だ兜率を離れずして、已に王宮に降り、未だ母胎を出でずして、人を度すること已に畢る』と。山僧、彼の耳埵辺に去きて輕輕に他に向かつて道えり、『少しく壳弄せり』と。忽然として雲門・趙州・徳山・臨濟・法眼・曹洞・滙仰、聞き得て、簇簇として上来し、棒喝交_二も馳せ_一、君臣・父子、声を透り色を透り、衆流を截断し、卓然として立つ。三教の聖人纔かに見て、懾羅して退く。山僧、眼を豁開し来たるに、元来是れ大宋国内、崑山県中、資福の刹竿頭上に家風を展べ、善法堂前に龍蛇混雜す」と。遂に大衆を召して云く、「且らく道え、夜来に夢むる底是なるか、今朝に説く底是なるか」と。喝一喝して云く、「是れ汝諸人、眼は什麼の処にか在る」と。

(3)今朝七月半、叢林解制忙、当頭老水牯、筋骨不堪当。大家团欒礼三拜、梅檀薔蔔一般香。

今朝は七月半ば、叢林は解制忙し。当頭に老水牯、筋骨は堪当せず。大家团欒して礼三拜し、梅檀・薔蔔は一般に香る。(4)開爐云、今朝開_レ爐向_レ火、諸方説_レ禪浩浩、靈山一字也無、普請大家証拠。既是一字也無、又証_レ拠箇什麼。蘇囓蘇囓。開爐に云く、「今朝、爐を開けて火に向い、諸方にては禪を説くこと浩浩たり。靈山は一字も也た無し、普く請う、大家証拠せよ。既に是れ一字も也た無し、又た箇の什麼をか証拠せん。蘇囓蘇囓」と。

(5)三月一日云、一即三三即一、碧眼胡僧数不_レ出、少林面壁九年、大似_レ抱_レ臑_レ賊叫_レ屈。屈屈。黄檗樹頭、討_二甚木蜜_一。

三月一日に云く、「一は即ち三、三は即ち一、碧眼の胡僧も数え出だせず。少林にて面壁九年し、大いに臑を抱きて屈と叫ぶに似たり。屈、屈。黄檗樹頭、甚の木蜜をか討ねん」と。

(6)拳徳山入_レ門便棒。頌云、倒_レ嶽傾_レ湫与麼来、小根魔子謾疑猜、神駒一躍_二三千界_一、空説門前下馬臺。

挙す、徳山は門に入らば便ち棒す。頌に云く、「嶽を倒し湫を傾けて与麼に來たれば、小根の魔子、謾りに疑猜す。神駒は一たび三千界に躍ぶに、空しく説く、門前の下馬臺」と。

(7) 拳僧問睦州、「以二重去二重、即不問、不下以二重去中一重上時如何。州云、昨日栽二茄子、今日種二冬瓜。師頌云、昨日栽二茄子、今日種二冬瓜、一声河満子、和月落二誰家。」

挙す、僧、睦州に問う、「二重を以て一重を去るは即ち問わず、一重を以て一重を去らざる時は如何ん」と。州云く、「昨日は茄子を栽え、今日は冬瓜を種く」と。師、頌して云く、「昨日は茄子を栽え、今日は冬瓜を種く、一声の河満子、月に和して誰が家にか落つ」と。

このように『笑菴悟和尚語』には少ないながらも七回に及ぶ上堂などが収められている。(1)上堂は、青原下の葉山惟儼(弘道大師、七四五―八二八)に因む「葉山陞座」の古則を拈提したものであり、文中で了悟は「祥符門下」と自称しているから、衢州の祥符寺に住持していたときになした説示であることが知られる。(2)上堂は、了悟が夢に見た孔子(孔子)と老子(李老君)と釈迦牟尼仏(黃面老子)の三聖人と交わした問答に因む面白い内容の上堂であるが、その中で了悟は「大宋国内、崑山県中、資福刹竿頭上」と述べていることから、これは蘇州崑山県治東南の薦巖資福禪寺の住持となした上堂であることが知られ、善法堂とはおそらく資福寺内に存した法堂の名称であろう。(3)上堂は、最初に「今朝七月半ば、叢林は解制忙し」と述べていることから、七月一五日の解制(解夏)になされたものであるが、このとき了悟がいずれの禪寺に住持していたのかは明確でない。(4)開爐上堂は、一〇月一日の開爐日になされたものであるが、了悟は自ら「靈山、一字も也た無し」と述べていることから、これは杭州の靈隱寺に住持していたときになしたことが判明する。(5)三月一日の上堂は、何時なされた上堂かは定かでないが、年時順に配列されているとすれば、靈隱寺で行なった上堂と見てよいであろう。一方、(6)と(7)の説示は、実際には上堂と解するよりは古則を頌賛した頌古に属するものであったと見るべきであろう。「枯崖和尚漫録」によれば、(6)は青原下の徳山宣鑑にちなむ「徳山棒」の古則に対する頌古であって、すでに触れたごとくかつて了悟が悟道した際に本師の密庵咸傑に呈した一首を載せたものにほかならない。また(7)は南嶽下の睦州道蹤(道明、陳尊宿・陳蒲鞋)にちなむ「睦州一重」の古則に対する頌古であって、『増集続伝燈録』の了悟の章に、ただ一つ「上堂」というかたちで載る内容と同一である点は注目される。

さらに『笑菴悟和尚語』には五回の上堂語と二首の頌古につづいて、わずか一首ながら仏祖贊として、

讚^二政黄牛^一。

清曠情懷世莫^レ羈、放心異類樂^二斯時^一、千山万水無窮意、只許灘頭白鷺知。

政黄牛を讚す。

清曠たる情懷、世に羈する莫し、放心の異類、斯の時を樂しむ。千山万水、無窮の意、只だ許す灘頭の白鷺の知ることを。という祖贊が収められている。これは杭州臨安県の功臣山浄土禪院に住持した法眼宗の浄土惟政（煥然、政黄牛、九八六一〇四九）を贊嘆したものであり、惟政は杭州知事の蔣堂（字は希魯、号は遂翁、九八〇一〇五四）などと交遊をなし、蔣堂のもとを訪問するのに当たって常に黄色い牛に股がって出かけたことから、世に「政黄牛」と称されたと伝えられる。

したがって、了悟は衢州西安県の祥符禪寺に開堂出世した後、蘇州吳県の靈巖禪寺や蘇州崑山県の資福禪寺などの住持を経て、最晩年に杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺に陞住していることになる。おそらく了悟には『笑菴悟和尚語』のもとになった『笑菴和尚語録』といった表題の語録が編集されていたものと見られ、これを抜粋したのが『続開古尊宿語要』に収められた『笑菴悟和尚語』であったものと推測される。『笑菴和尚語録』を編集した門人としては、いうまでもなく唯一の法嗣であった晦巖大光のほか該当する禪者は存しないであろう。

一方、上海の華東師範大学出版社より一九八七年一〇月に『船子和尚撥棹歌』（上海文献叢書）二卷一冊が影印されている。これは菓山下の船子徳誠（華亭和尚）の詩偈三九首を収録して元代に重刊したものであるが、宋元代において船子徳誠に対する評価がきわめて高まっていたことを伝える禅籍である。『船子和尚撥棹歌』巻下「諸祖讚頌」には、実に七七人の禅僧・教僧および在俗その他の人々が詠じた賛頌が載せられているが、その中に「咲菴悟禪師」の作として、菓山毒菓灌^二喉嚨^一、菓発無^レ端累^二道吾^一、掩^レ耳直饒親薦得、鉄船翻覆錯名模。

菓山の毒菓、喉嚨に灌ぎ、菓発して端無くも道吾を累わす。耳を掩いて直饒い親しく薦得するも、鉄船は翻覆して錯つて名模す。

という一首が載せられている。了悟が唐代に活躍した船子徳誠に対する祖贊を残していることが知られる。この仏祖贊もおそらく『笑菴和尚語録』に収められていたものから抜粋されているのであろう。

また『禅宗頌古聯珠通集』巻三四「韶州雲門文偃禪師」の章の増收部分には、

雲門上堂、因_レ聞_二鐘聲_一乃曰、世界与麼広闊、為_レ甚麼_二向_レ鐘聲_一披_二七条_一。僧無_レ語。師曰、七里灘頭多_二蛤子_一。という古則に対して、了悟が詠じた頌古（統藏一一五・二二三）として、

試問鐘聲披_二七条_一、輕輕擊著無明發。買_二來餠餅_一是饅頭、苦哉觀世音菩薩。（笑菴悟）

試みに問う、鐘聲にて七条を披ることを、輕輕に擊著すれば無明発す。餠餅を買い来たるに是れ饅頭なり、苦なるかな、觀世音菩薩。

という一頌が載せられている。これは『無門関』第一六則「鐘聲七条」の古則として知られる雲門宗祖の雲門文偃（匡真禪師、八六四―九四九）の上堂に対して、了悟が詠じた頌古である。

晦巖大光について

笑庵了悟には法を嗣いだ門人として、わずかに晦巖大光という禪者の名のみが伝えられている。しかしながら、大光についてはその足跡がほとんど辿れず、如何なる活動をなしたのか、詳しい行実が何ら解明されていない。当時、大光はそれなりの活動をなしていたはずにも拘わらず、なぜ禪宗燈史に名すら記されずに終わつたのか、当時の諸禪者の語録・詩文集などにも関連した記事がきわめて断片的にしか見られない。そうした理由については明確でないが、大光が入宋求法した日本僧の道元とも関わり深い禪者であったことから、つぎに現時点で判明し得る大光の事跡を一通りまとめてみることにしたい。

この人は法諱を大光といい、道号を晦巖または晦岩あるいは晦崱と称している。法諱の大光とは大光明のこと、大いなる光の意であり、おそらく本人の器量なり度量の広さなどを踏まえた命名であったものと見られる。ちなみに「大」の字を系字として用いた禪者として、古くは南嶽下の長慶大安（懶安、延聖大師、円智大師、七九三―八八三）や青原下の投子大同（慈濟大師、八一九―九一四）などがあり、大光と同時代には『十牛図』に頌を付した楊岐派の壞納大璉があり、若干ながら後輩には『物初贖語』二五巻で名高い大慧派の物初大観（二〇一―一二六八）の存在が知られている。また元代には『蒲室集』一五巻で名高い大慧派の笑隠大訶（蒲室、広智全悟大禪師、一二八四―一三四四）があり、曹洞宗宏智派に無印大証（自鏡叟、仏日円明慧辯禪師、一二九七―一三六一）が存している。日本禅林にも形相の厳しさで知られる聖一派の癡兀大慧（仏通禪師、一二二九―一三二二）がおり、『大智禪師偈頌』で名高い曹洞宗明峰派の祇陀大智

(二一九〇—一三六六)などが存している。「大」の字を道号や禪師号の上字に使用する例はきわめて多いが、法諱の上字に使用する例は比較的少ないといえよう。

一方、道号である晦巖の「晦」とは眩ますとか暗いといった意であり、晦光で光を眩ます、光を發せずに深く身を隠すことである。北宋末期から南宋代にかけて江南禪林において「晦」の字を道号に用いた禪者は比較的が多い。北宋末期には黄龍派祖の黄龍慧南(普覺禪師、一〇〇二—一〇六九)の高弟に晦堂祖心(宝覺禪師、一〇二五—一一〇〇)がおり、この人は洪州(江西省)義寧県の黄龍山崇恩禪寺に住持し、その流れはやがて日本僧の明庵栄西(千光法師、一一四一—一二二五)によつて日本禪林に導入されて日本の黄龍派(千光派)を形成している。南宋初期には楊岐派(大慧派祖)の大慧宗杲の高弟に晦庵彌光(禪狀元・光狀元、?—一一五五)という禪者が存しており、この人は泉州(福建省)南安県二十一都の教忠顕慶禪寺に化導を敷いている。また楊岐派の龍門清遠(仏眼禪師、一〇六七—一一二二)の法孫にも晦庵慧光(恵光とも)という禪者が存し、この人は信州(江西省)弋陽県玉亭郷の龜峰山瑞相禪寺や泉州晋江県の法石禪寺に住持しており、慧光の法を嗣いだ蒙庵元聡(蒙叟、仏智禪師、一一三六—一二〇九)のもとには日本より我禪房俊苒(不可棄法師、一一六六—一二二七)が入宋して参禅している。晦庵彌光や晦庵慧光の場合、道号の「晦庵」と法諱の下字である「光」との関係が大光と同じ発想に基づいているのは興味深い。十二世紀後半の南宋中期に至つても『宗門聯燈会要』三〇巻を編纂した大慧派の晦翁悟明(真懶)や『人天眼目』六巻を編纂した嗣承不詳の晦庵智昭も存している。大光より若干ながら早く天台宗にも晦菴慧明(無晦、?—一一九九)の存在が知られている。また大光と同世代には大慧下の遯庵宗演の法を嗣いだ晦堂法明がおり、この人は大光よりも後に明州阿育王山の第三六世になつてゐる。

大光と同じ南宋中期以降に至つて同じく晦庵の道号を用いた禪者ないし教僧として、十三世紀の禪者として松源派に松源崇嶽の法を嗣いだ晦庵□暉がおり、教僧として天台宗の晦庵法照(仏光法師、普通法師、一一八五—一二七三)が存している。とくに法照に関してははしばしば「晦庵」の表記で大光との間で混乱が認められることから、本稿でも随所で問題となる存在である。

大光がいずれの地の出身で如何なる俗姓であつたのかについては何も知られていないが、後に詳しく触れることゝ『江湖風月集』巻上に「西蜀晦谷光和尚」とある晦谷□光という禪者が晦庵大光のことを指すのであれば、大光は西蜀すなわち四川省出身の蜀僧であつたことになる。ただし、晦谷□光については破庵派無準下の無準師範の法を嗣いだ晦谷

□彰のことを指している可能性も存している。晦谷光が晦巖大光のことを指し、大光が西蜀出身の僧であつたとすれば、後に示すごとく大光のもとに阿育王山の老典座や成桂知客など蜀僧が多く参集していたことや、同じ蜀僧である無準師範が大光と親しい交友を持ったことなども頷けるのである。

大光が如何なる因縁で了悟の門人となつたのか、その間の事情についても何ら定かでないが、あるいは大光はもともと師翁の密庵咸傑の高名を聞いて咸傑の晩年に門下に投じ、咸傑の示寂して後に法兄の了悟に随侍することになつたのかも知れない。大光のほかに了悟の法を嗣いだ門人の名は伝えられていないことから、了悟としては大光ひとりを受け育成することに生涯を賭けた感があるろう。すでに触れたごとく了悟には『統開古尊宿語要』第四集に『笑菴悟和尚語』が収められているから、もともとこの人には『笑菴和尚語録』といった表題のまとまつた語録が編集され、それを抜粋したのが『笑菴悟和尚語』であつたものと推測される。『笑菴和尚語録』を中心となつて編集したのであるろう門人については、法嗣である大光のほかに妥当な人物が考えられず、おそらく大光は侍者として生前の了悟が語つたことばをまとめ、『笑菴和尚語録』として編集刊行しているものであらう。ただし、大光が如何なる機縁で了悟の法を嗣いだのか、その間の事跡が何ら伝えられていないのが惜しまれる。

頭親寺への出世開堂

その後、大光が明確に住持したことが知られるのは、明州鄞県の阿育王山広利禅寺と天童山景德禅寺という二ヶ寺のみであるが、阿育王山と天童山という両禅刹は東浙（浙江東部）を代表する名刹であるだけに、大光が突然にそうした大刹に住持することになったとは思われない。阿育王山や天童山に住持する以前に、大光がどのような禅刹で接化をなしていたのか、残念ながら住持地すら定かでない。わずかに『松源和尚語録』巻下「偈頌」に、

送光長老住頭親。

同条端的不同。条、箇箇瀉山水牯牛。一做「這般蟲多」去、牽犁拽杷幾時休。

という偈頌が載せられていることに注目したい。これは自らと同じ系統に属する光長老という禅者が頭親寺に住持するのに際し、松源崇嶽が餞別として送つた偈頌にほかならない。頭親寺とは崇嶽が晩年に開山始祖となつた頭親報慈禅寺のことと見てよく、『松源和尚語録』巻下には「開山頭親報慈禅寺語録」が収められている。崇嶽が開山祖師として招

聘された頭親報慈禪寺が具体的に何れの地に存した禅刹なのか、また開山に拝請された年時が何時のことであったのかが明確ではないものの、状況からして「送光長老住頭親」の偈頌にいう頭親寺が崇嶽ゆかりの頭親寺であることは疑いなくろう。とすれば、崇嶽が「条を同じくして端的に条を同じくせず」と語るように、頭親寺の後席を譲与した光長老が大光のことを指している可能性はきわめて高いと推測される。すでに触れたごとく崇嶽は大光の本師である笑庵了悟とは同門として親しく交友をなし、また自らが示寂する際には靈隱寺の後席を了悟に託しているのである。そんな崇嶽が信頼を寄せる了悟の一嗣である大光に後席を譲つたとする推測が妥当であるとすれば、崇嶽としては示寂に臨む以前に頭親寺の住持職を法姪の大光に託していたことになる。

光長老が大光を指しているとすると、大光が出世開堂したのは崇嶽が示寂した嘉泰二年（一一〇二）八月より以前であったことになる。また崇嶽はすでに大光が了悟の法を嗣いでおり、自らの法姪に当たっているのを熟知していたことになる。さらに自らが開山始祖となった寺院を法嗣ではなく法姪の大光に託しているのであれば、崇嶽はそれなりに大光の器量を十分に認めていたことにもなる。

阿育王山広利寺への陞住

その後、大光が如何なる禅刹に陞住したのかは定かでないが、やがて大光は明州鄞県東五〇里に存する阿育王山広利禅寺に陞住する好因縁に恵まれている。おそらく大光は頭親寺のみでなく、ほかにも十刹などに列する著名な禅刹の住持を歴任し、やがて阿育王山に入院しているものと見られるが、その間の事情などは全く知られていない。

ちなみに『環溪和尚語録』巻下に収録される法嗣の覚此が状した「行状」によれば、

遂棄_レ所_レ学祝髮、受_二具戒於成都甘露寺_一。繼而往_二凌雲_一、謝_二享泉_一、泉勉令_二行脚_一。二二、遊_二大慈講筵_一、知_二其未_レ為_二究竟_一。於_レ是、舍而謁_二晦菴光公于正法_一、訥堂辨公于六祖、土菴圭公于東林、皆往參決、昼夜孳孳、究_二明己事_一。（中略）已而再從_二訥堂于六祖_一、土菴于正法。自_レ是言語相契、機緣脗合、二老皆擊節稱_二賞之_一。（中略）尋遊_二廬山_一入_レ浙、道_二蘇湖_一至_レ杭。開_二仏鑑禪師住_二育王_一、道風遠播、乃絶_二江造_二玉几_一。

とあるから、破庵派無準下の環溪惟一（一一〇二—一一二八）は二二歳の頃すなわち嘉定一六年（一一三三）の頃に成都の正法禅寺において晦庵□光という禅者に謁していることが知られる。ここにいう晦庵光は嗣承が定かでないが、まも

なく正法寺の住持職を嗣承不詳の土庵□圭に譲っている。嘉定一六年の前後に成都の大慈寺に住持していた晦庵光を、ほぼ同時期に阿育王山に住持していた大光すなわち晦岩光（晦谷光）と同一人物と見るにはかなり無理があるろう。ただし、いま一人の訥堂淨辯（淨辨とも）とは、松源下の雲巢道巖（巖默）の法を嗣いだ高弟であり、成都灌泉の馬祖寺（六祖寺か）に住持したものらしいが、その後、蘇州呉県の万寿報恩光孝禪寺に住持しているから、四川の禪寺に住持していた禅者が、その直後に江蘇や浙江の五山十刹に遷住することはそれほど不自然ではない。その後、唯一は行脚して明州鄞県の地に到り、大光の後席として阿育王山に住持した破庵派の無準師範に参学してその門下に連なっている。

阿育王山は古くインドの阿育王（アショーカ王）が建てた仏舎利塔の地の一つと信ぜられ、東晋の義熙元年（四〇五）に伽藍が建てられたのに始まると伝えられる。北宋代には広利禪寺の勅号を賜っており、雲門宗の器之懷璉（大覚禪師、一〇〇九—一〇九〇）らが住持している。南宋代には楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、大慧普覚禪師、一〇八九—一一六三）が住持し、また大慧派の普門從廓（妙智禪師、一一一九—一一八〇）や拙庵徳光（東庵、仏照禪師、一一二二—一二〇三）らが相継いで住持し、舍利殿および仏舎利宝塔を整備している。⁽⁹⁾南宋中期の嘉定年間（一二〇八—一二二四）に阿育王山は禅宗五山の第五位に列したとされ、明州では同じ鄞県の天童山景德禪寺と並ぶ名刹であつて、現今の寧波市の阿育王寺へと連なっている。また阿育王山の歴史を記した寺志として『明州阿育王山志』一〇巻と『明州阿育王山続志』六巻が編纂刊行されている。

大光の前後に阿育王山に住持した禅者について、日本中世に編纂された『扶桑五山記』一「育王住持位次」には、
廿九、孤雲権禪師。三十、如雲崇禪師。卅一、晦岩光禪師。卅二、無準範禪師。卅三、大夢因禪師。

と伝えられており、一方、中国で明代に編纂刊行された『明州阿育王山続志』巻六「先覚攷（補遺）」には、
第三十代、孤雲権禪師。陝西人、嗣二仏照光公。十一月十七日忌。

第三十一代、如菴崇禪師。九月十三日忌。

第三十二代、晦巖光禪師。八月十二日忌。

第三十三代、無準範禪師。嗣二臥龍先公。三月十八日忌。

第三十四代、石堂明禪師。二月初七日忌。

第三十五代、大夢因禪師。十月廿九日忌。

と伝えられている。両史料は若干ながら世代や人名に相違が存するものの、大光の前後の住持に関しては一致しており、当時の阿育王山は孤雲道権・如庵惠崇・晦巖大光・無準師範・石堂□明・大夢徳因と世代が推移している。

孤雲道権は陝西(陝西省)の人であったとされるが、これはおそらく一族が陝西を本貫とし、北宋末期に江南へと下ったことを意味するのであろう。道権は大慧下の拙庵徳光に参じて法を嗣いでいるから、道元が実際に明州鄞県の天童山景德禅寺で参学した無際派(一一四九—一二二四)や杭州餘杭県の径山興聖万寿禅寺で参学した浙翁如琰(仏心禅師、一一五一—一二二五)などとは同門の間柄であつて、おそらく了派や如琰とは年齢的に同世代か若干は年長であつたものと見られる。しかも道権は嘉定二年(一二〇九)に福州府城西南の西禅長慶禅寺に住持したことが伝えられているから、その後、明州の阿育王山に遷住していることになる。道権がいつ示寂したのかは定かでないが、忌日は一月一七日のこととされている。後に詳しく触れるごとく、道元と関わつた老典座の語る内容などを踏まえると、道権が示寂したのは嘉定年間の早い時期であつたものと推測される。

ついで楊岐派の如庵□崇(一に如雲崇とも)という禅者が孤雲道権の後席を継いで阿育王山に住持したことが知られる。ここにいう如庵崇については、僅かに東福円爾が将来した「宗派図」に「別峯印禅師」の法嗣として「如庵崇禅師」の名が存しており、楊岐派の別峰宝印(慈辯禅師、一一〇九—一一九〇)の法を嗣いだ門人であつたことが判明する。しかも『明州阿育王山志』卷三「塔廟規製」には、嘉定七年(一二二四)八月に秘書省校書郎の凌雲薛叶が撰した「育王上塔碑記」が収められており、そこには「嘉定二年春、温陵沙門大明、(中略)明持住山如庵惠崇書」来、求記」という記事が存しているから、如庵崇の法諱が惠崇であり、しかも嘉定七年前後に阿育王山の住持を勤めていたことが判明する。温陵(浙江省)沙門の大明についても定かでないが、あるいは惠崇の門人であつたのかも知れない。少なくとも嘉定七年の時点ですでに住持が道権から惠崇に交代していたことが知られるのであり、それ以前には道権は住持を退いたか、示寂しているものと見られる。惠崇がいつ示寂したのかは定かでないが、住持期間はいくぶん長かつたものと見られ、その忌日は九月一三日であつたことが伝えられている。また惠崇が示寂して葬儀がなされた際に楊岐派の高原祖泉(？—一二二九)がなした拏哀の法語が『禅林諸祖弔靈語教』卷七「拏哀」に収められている。²⁰⁾

その後、惠崇の後席を継いで阿育王山の住持となつたのが大光であり、少なくとも嘉定七年より以降に大光は惠崇の後席を継ぐかたちで阿育王山に住持しているものである。惠崇と大光に如何なる道交が存したかは定かでないが、惠

崇の遺書など後席を託されるかたちで大光は阿育王山に入寺しているものと推測される。大光が阿育王山に陞住した時期についても定かでないが、少なくとも道元が入宋求法した嘉定一六年（一二二三）よりいくぶん以前であったものと思われる。先の老典座も阿育王山の大光のもとで典座職に抜擢されていることなるうから、大光が一概に道元に批難されるだけの愚蒙な禅者ではなかったはずである。

道元と阿育王山の老典座

ところで、道元の『典座教訓』によれば、入宋求法した道元は南宋の明州（浙江省）慶元府の港に着岸してまもない嘉定一六年（一二二三）五月四日に、阿育王山の一介の老典座と問答を交わしている。このときこの老典座は自身のことをつぎのように道元に紹介している。

又嘉定十六年癸未五月中、在_レ慶元舶裏、倭使頭説話次、有_二老僧_一來。年六十許載。一直便到_レ舶裏、問_二他和客_一、討_二買倭棧_一。山僧請_レ他喫_レ茶。問_二他所在_一、便是阿育王山典座也。他云、吾是西蜀人也、離_レ郷得_二四十年_一、今年是六十一歳、向來粗歷_二諸方叢林_一。先年樅孤雲住裏、討_二得育王_一掛搭、胡乱過。然去年解夏了、充_二本寺典座_一。

老典座は「吾れは是れ西蜀の人なり、郷を離れて四十年を得たり、今年是れ六十一歳なり、向來、粗ぼ諸方の叢林を歴る。先年、樅孤雲の住裏に、育王を討ね得て掛搭し、胡乱に過ぐ。然して去年解夏了りて、本寺の典座に充つ」と道元に語っている。老典座は西蜀（四川省）の出身であり、嘉定一六年の時点で年齢が六一歳であったと述べているから、逆算すると隆興元年（一一六三）に生まれたことになり、まさに大慧派祖の大慧宗杲が示寂した年に当たっており、曹洞宗の長翁如淨よりは一歳の年少となる。老典座は二〇歳をすぎた頃に郷里の西蜀を離れ、江浙の叢林を遍歴すると四〇年を経たというから、久しい行脚辦道を経たことが知られる。また老典座が阿育王山に掛搭したのは大慧派の孤雲道権が住持であったときというから、すでにこのとき少なくとも一〇数年ほど阿育王山に身を寄せていたことになり、典座職に就任する以前の四〇歳代の終わり頃より寺内の職位をいくつか歴任してきたことであろう。したがって、この老典座は道権が示寂した後は楊岐派の如庵惠崇のもとに身を寄せ、さらに惠崇から大光へと住持が代わっても阿育王山に留まっていたことにならう。嘉定一四年（一二二二）七月一五日の解制罷より以降にこの老典座は住持の大光より典座職に任命されたのであり、翌年五月四日の夏安居の最中に慶元府港の船舶で道元と知り合ったわけである。老典座が

典座という知事位の要職に就いていた当時、阿育王山の住持を勤めていたのは紛れもなく本稿で問題にしている大光であり、大光の抜擢によつて老典座は大刹阿育王山の典座に就任できたことになる。道元と触れ合つて多くの感銘を与えた老典座は、四〇代後半から孤雲道権・如庵惠崇・晦巖大光という三代の住持のもとで、実に一〇年以上の長きにわたつて阿育王山に居住しつづけていたわけであり、老典座としては住持の大光に対して感謝こそすれ、何ら毛嫌いななどはしていなかったはずであろう。

さらに『典座教訓』によれば、嘉定一六年七月に道元が天童山に掛錫していたとき、七月一五日の解制罷に阿育王山の老典座が職位を辞して天童山を訪れ、再び道元と交流を持つてゐる。『典座教訓』には先の記事につづいて、

同年七月、山僧掛錫天童一時、彼典座来得相見云、解夏了、退典座歸郷去。適聞兄弟說老子在箇裏、如何不來相見。山僧喜踊感激接他。說話之次、說出前日在船裏文字辦道之因縁。典座云、文字一者、為知文字之故也。務辦道者、要肯辦道之故也。山僧問他、如何是文字。座云、一二三四五。又問、如何是辦道。座云、徧界不曾藏。其餘說話、雖有多般、今所不録也。山僧聊知文字了辦道、乃彼典座之大恩也。向來一段事、說似先師全公、公甚隨喜而已。山僧後看雪寶有頌示僧云、一字七字三五字、万像窮來不為捩、夜深月白下滄溟、搜得驪珠有多許。前年彼典座所云与今日雪寶所示、自相符合。弥知彼典座是真人也。

というやり取りが記されている。老典座は解制とともに阿育王山での典座職を終えているから、老典座が典座職に在つたのは一年間であつたことになる。このとき彼は老齡の身をおして故郷西蜀へ帰ろうとしており、具体的には阿育王山の大光のもとを辞して帰郷する前に天童山に立ち寄つて道元を訪ねているわけである。老典座としては日本僧道元が天童山に席を置いている噂を伝え聞き、わざわざ道元に会おうと天童山にやつて来たことになる。このとき道元と老典座は文字・辦道についての問答のほかにも多くの説話を交わしたものでらしく、老典座が去つた後、その一部始終を道元が先師明全（仏樹房、一一八四—一二二五）に告げると、明全はこのほか共に喜んでくれたと書き残している。

大光に対する道元の批判

ところで、『正法眼蔵』「仏性」の巻において、道元は阿育王山と大光に関してつぎのような示衆をなしている。予、雲遊のそのかみ、大宋国にいたる。嘉定十六年癸未秋のころ、はじめて阿育王山広利禪寺にいたる。西廊の壁間に西天

東地三十三祖の変相を画せるをみる。このとき領覽なし。のちに宝慶元年乙酉夏安居のなにかさねていたるに、西蜀の成桂知客と廊下を行歩するついでに、予、知客にとふ、這箇是什麼変相。知客いはく、龍樹身現円月相。かく道取する顔色に鼻孔なし、声裏に語句なし。予いはく、真箇是一枚画餅相似。ときに知客大笑すといへども、笑裏無刀、破画餅不得なり。すなはち知客と予と、舍利殿および六殊勝地等にいたるあひだ、教番拏揚すれども、疑著するにもおよばず。おのづから下語する僧侶も、おほく都不是なり。予いはく、堂頭にとふてみん。ときに堂頭は大光和尚なり。知客いはく、他無鼻孔、对不是、如何得知。ゆへに光老にとはず。愆麼道取すれども、桂兄も会すべからず、聞説する皮袋も道取せるなし。

道元は嘉定一六年（一二二三）の秋の頃に初めて阿育王山に赴いており、秋は七月から九月の間であるから、おそらく先の老典座と七月の解制罷に天童山内で問答を交わした後、道元は実際に天童山からほど近い阿育王山を訪れている。天童山と阿育王山は近距離に存しており、阿育王山を訪れた道元は寺の内外の堂宇や史跡をくまなく參觀して回つたものと見られ、西廊の壁間に「西天東地三十三祖」の変相が画かれてあるのを目の当たりにしたが、このときは何もその意図を心に明らめるところがなかったと述べている。秋になつて道元が阿育王山を訪れたのは先の老典座の影響も多分に存したのであろうが、おそらく入宋以前から日本仏教とも関わりの深かつた阿育王山を一度は拝登したいという思いからであつたと見てよい。阿育王山はかつて日本の榮西が乾道四年（日本の仁安三年、一一六八）に訪れて住持であつた大慧派の普門從廊（妙智禪師）と交友を持つた禪利であり、また淳熙一六年（日本の文治五年、一一八九）に達磨宗の大日房能忍（深法禪師）が門人の練中・勝弁を派遣して大慧派の拙庵徳光（仏照禪師）に偈頌を呈して印可を得たゆかりの禪利である。当然のことながら、阿育王山を取り巻く日本仏教との諸般の事情を道元も熟知していたはずであらう。

その後、宝慶元年（一二二五）の夏安居に至つて、道元は制中禁則の規定を破つて再び阿育王山を訪れているが、このときの住持は明確に大光であつたことが知られる。宝慶元年の夏安居中には、道元は如浄との間で五月一日に面授をなしており、五月二四日には明全の逝去を見届け、さらに葬儀茶毘をなしているから、道元が阿育王山を訪れたとすれば、明全の葬儀を終えて以降の六月中から七月一五日の解制までの間と見てよいであらう。このときすでに道元は身心脱落の機縁を得ており、その境界はきわめて深まっていたのであり、この時期に禁則を破つてまで阿育王山を再び訪れている背景には、先師明全が五月二四日に示寂したこと、二七日に明全の遺体を茶毘に付すると舍利が出現したことなどを踏まえた異例の行動であつたものと推測される。道元としては阿育王山の舍利殿や六殊勝地を拝登することも目的

であつたものらしく、知客の成桂の案内でそれらの史蹟をめぐる際に両者は数番の問答を交わしたとされる。

ちなみに道元が阿育王山を訪れる半世紀以上前に比叡山僧の明庵栄西と東大寺僧の俊乗房重源（南無阿弥陀仏、入唐三度聖人、一一二二—一一〇六）が阿育王山を訪れており、さらに帰国した重源は舍利殿の修復のために日本から良材を送っている。しかも重源の功績を称えて舍利殿内には重源の木像が奉安されたと伝えられるから、舍利殿に拝登した道元は舍利宝塔を仰ぎ見たのみでなく、殿内に飾られていた重源の尊像なども拝する機会が存したはずであろう。

このとき道元は阿育王山で再び西廊の変相図を眺めており、ただ円月相のみを画いた一つの図に足を止めている。西蜀出身の成桂にその絵が何であるのかを尋ねると、成桂は西天第十三祖の龍樹（那伽闍刺樹那）の円月相である旨を告げている。道元は龍樹の円月相に仏法の真髓を見、一箇の画餅のごとく捉えたのであるが、成桂はじめ阿育王山の多くの僧侶らは円月相の真意を理解できていなかったとされる。そのために道元は住持（堂頭）の大光に真意を問うてみたい旨を成桂に告げると、成桂より「他は鼻孔無し、対不是、如何んが知るを得ん」と告げられたとされる。成桂は「大光は仏法の当体を弁えておらず、何も答えられないであろうから、どうして円月相の真意など分かるか」と道元に述べているのであり、仮にも五山第五位の阿育王山の住持であつた大光が会下の頭首からもきわめて低くしか評価されていなかったことになろう。このとき道元は成桂の忠告を素直に受け入れ、円月相の真意を住持大光には問ひ質すことはなかつたと自ら述懐している。

しかしながら、道元は阿育王山で住持の大光と何ら問答も交わさなかつたのかというと、実際にはそうではなく若干の問答商量を行なっていることが知られる。すなわち、道元が在宋中に本師の如浄と交わした問答を筆録した『宝慶記』には、つぎのごとき大光に関わる興味深い一段が存している。

拜問、先日謁_二育王山長老_一大光_二之時、聊難問次、大光曰、仏祖道与_二教家談_一水火也、天地懸隔。若同_二教家之所_一談者、永非_二祖師之家風_一。今大光道、是耶非耶。

堂頭慈誨曰、唯非_二大光一人有_二妄談_一、諸方長老皆亦如是。諸方長老、豈明_二教家之是非_一耶、那知_二祖師之堂奥_一耶。只是胡乱作_二來長老_一而已。

道元は嘉定一七年（一一二四）から宝慶三年（一一二七）に至る四年間にわたつて天童山景德禪寺において如浄に参学しているが、このとき両者は阿育王山の太光のことを取り上げて問答を行なっている。道元のことばとして「先日、

育王山長老大光に謁するの時、聊か難問する次いで」とあるから、如浄との問答が交わされる暫く前、道元は阿育王山を訪れて親しく大光に謁し、実際に大光と問答を交わしていることが知られる。しかも「難問の次いで」とあるから、道元は阿育王山において大光と相見する機会を得て、いくつかの問答を交わす機会を与えられたものと解される。難問とは疑って問うこと、責め問うといった意であるから、このとき道元は大光に対して日頃の疑点のいくつかを鋭く問い質したものでらしい。如浄との問答集である『宝慶記』以外に、道元が他の禪者らと交わした筆記集が存したのであれば、その間のやり取りも判明したはずであろうが、残念ながら詳しい商量については全く伝えられていない。道元が阿育王山の²³大光と問答を交わしたのは、先の「仏性」の巻に語られる宝慶元年夏安居の時期に当たると見られるから、龍樹の円月相について真意は問い質さなかつたにせよ、このとき道元が大光とも実際に真摯に問答を行なつた事実が窺われる。そんな両者が交わした一連の問答の一つとして、道元は大光に対して禪家の仏祖道と教家の教説の異同について問いをなしている。道元としては仏祖の大道と教宗の談義が別物ではないことを期待して大光に詰め寄つたわけであろうが、大光は道元の質問に対して、

仏祖の道と教家の談とは水火なり、天地懸かに隔たる。若し教家の談ずる所に同じければ、永く祖師の家風に非ず。

と答えたとき、道元の期待を裏切つている。大光は徹底した教外別伝の立場に立つて禪宗と教宗が水火のごとく相い容れないものであり、雲泥の差があることを強調しており、仏祖道が教家の所談と同じ次元であつたならば、それはもはや祖師の家風とは言えないとまで道元に語つたというのである。内容の善し悪しはともかくとして、これは阿育王山の²⁴大光が語つたことばを道元が書き残している点で貴重な内容といつてよい。

その後、天童山に戻つた道元は阿育王山の²⁵大光が説く教外別伝の捉え方が果たして正しいか否かについて、天童山の如浄に「今の²⁶大光の道うこと、是なりや非なりや」と尋ねている。このとき如浄はこの道元の質問に対して、

唯だ大光一人に妄談有るに非ず、諸方の長老、皆な亦た是の如し。諸方の長老、豈に教家の是非を明らめんや、那ぞ祖師の堂奥を知らんや。只だ是れ胡乱に長老と作り來たるのみ。

と答えたとき、²⁷如浄は大光の説くところを妄談として退けているわけであるが、それは大光ただ一人の所説ではなく、当時の諸方の長老たちが等しく語つているところであつて、真に仏法の堂奥を明らめた者の捉え方ではないと道元に告げている。当時の禪家が仏典に基づく教家の説を蔑ろにし、あたかも祖道が教説と次元を異にしているかのごとき

誤った理解を質しているわけであり、教説を蔑ろにする江南禅林の風潮に一石を投じたかたちとなっている。²⁶⁾

いずれにせよ、『正法眼蔵』「仏性」の巻や『宝慶記』において、阿育王山の大光は道元から何ら好印象を持たれておらず、きわめて低い評価しか得ていないのが実情であろう。ただ、それは大光個人を名指しで批判しているかたちをとっているものの、道元としては正師如浄の存在を際立たせたいがため、あえて阿育王山という大刹の長老であった大光を引き合いに出して批判するかたちで、より説得力を持たせようとする独自の説示法であったとも受け取られる。いわば阿育王山の大光は道元が入宋した当時の浙江の五山禅林を代表する老宿として宋朝禅批判のやり玉に挙げられているというのが実情であって、その面では大光ひとりが特別に問題のあった禅者ということではなかったと見るべきであろう。

先の阿育王山の老典座との問答などからすると、大光のもとでは知事や頭首といった職位が厳格に保たれており、典座職の老僧もかなりの人物であったと見られ、知客の成桂もそれほど不相応な人材とも見られず、阿育王山の叢林としての体裁はそれなりに整っていたと思われることから、必ずしも道元が語る大光の評価がこの人のすべてではなかったと解しておきたい。道元にとつて阿育王山の存在は、いわば正師如浄の正法性をより鮮明に浮かび上がらせる上で格好の対象でもあったわけである。

大光の後席を継いで阿育王山に住持したのは、やがて当代随一の禅匠として活躍することになる破庵派の無準師範(円照、仏鑑禅師、一一七七一—二四九)であり、大光にとつて師範は法系上の従兄弟に当たる禅者にほかならない。ましてや師範は劍州(四川省)梓潼県の雍氏出身の蜀僧であり、大光が蜀僧であったとすると、両者は同郷の間柄であったこととなる。『仏鑑禅師語録』巻一「住慶元府阿育王山弘利禅寺語録」の上堂配列からすると、それまで明州奉化県の雪竇山資聖禅寺の住持であった師範が阿育王山に陞住したのは宝慶三年(一一二七)の春から夏にかけての頃と見られ、その直前に大光は何らかの理由で阿育王山の住持をすでに退董していたことが知られる。

道元が二度にわたつて阿育王山を訪れたときには住持は大光であったが、道元が帰国の途に着く宝慶三年の初頭か宝慶二年の末頃には住持の大光が退院し、宝慶三年の春から夏の頃には師範が交代して新命住持として入院しているわけである。師範が阿育王山に住持した際、前住となつた大光は如何なる立場となり、如何なる活動をなしていたのか、その間の事情などは伝えられていない。かつて師範は靈隠寺で笑庵了悟に参学した因縁があり、この頃から大光とも関わりを持っていたものである。あるいは大光が蜀僧であったとすれば、師範と大光の関わりはもっと早くからなされて

いた可能性も存しよう。

枯禪自鏡が天童山に陞住する

無準師範の語録である『仏鑑禪師語録』巻五「小仏事」には「為天童無際和尚起龕」という起龕法語が収められており、無際了派が嘉定一七年（一一二四）の春から夏の頃に示寂した際、明州奉化県西北六〇里の雪竇山資聖禪寺の住持であった師範は、自ら天童山に赴いて起龕仏事を執行していることが知られる。古写本『建撕記』によれば、日本僧の道元は了派が示寂する直前に諸山歴遊から天童山に舞い戻っていることから、このとき起龕師を勤めて法語を唱える師範の尊顔を遠く拝していたのではなからうか。ちなみに天童山の了派が示寂した際、秉炬師を勤めた禪者が誰であったのかは定かでないが、隣峰阿育王山の住持であった大光が天童山に到つて了派の葬儀を取り仕切つた可能性は高いであろう。ただし、了派は示寂に際して浄慈寺の如浄に遺書を呈して天童山の後席を託しているが、このとき阿育王山の太光に対して果して如何なる対応をなしていたのかについては定かでない。

一方、天童山では宝慶三年（一一二七）七月一七日に第三一世の如浄が世寿六六歳で示寂しており、『仏鑑禪師語録』巻一「住慶元府阿育王山広利禪寺語録」に「前住天童浄和尚遺書至上堂」が収められているから、如浄の示寂後まもなく遺書が雪竇山から阿育王山に住持した直後の師範のもとに届けられている。実に師範は天童山の了派と如浄という二人の住持が逝去したのと深く関わっており、単に雪竇山や阿育王山の住持であつたというだけでなく、師範が若い頃から了派や如浄とも道交が深かつたらしい事情が窺われよう。

ところで、南宋末期に大慧派の枯崖円悟が編集した『枯崖和尚漫録』巻上の「慶元府天童如浄禪師」の項によれば、後於太白山感疾退席、下涅槃堂始大哭、為鑑足庵焼香。入寂時、侍者告以法堂宝盖鏡墮於座上。曰、鏡枯禪至矣。如三其言。

とあり、如浄は示寂に際して「鏡枯禪至れり」と述べたとされ、杭州靈隱寺の住持であつた虎丘派の枯禪自鏡を新たな住持に指名したものでらしく、まもなく自鏡が天童山の第三二世として迎えられている。自鏡は虎丘派の密庵咸傑の法を嗣いでいるから、大光の法叔に当たたる禪者である。編者未詳『禪苑蒙求拾遺』に載る「枯禪鏡墮」の古則にも、

増集続伝燈録曰、枯禪自鏡禪師、見密菴於靈隱、機縁默契。久之開法隆興上藍。宝慶元年被旨陞靈隱、移天童。枯

崖漫録曰、天童如淨禪師、感疾退_レ席、下_二涅槃堂_一、為_二鑑足庵_一、燒香。入寂時、侍者告以_三法堂宝蓋鏡墮_二於座上_一。曰、鏡枯禪至矣。如其言。鄒_二應傳撰_一枯禪錄序曰、照子落_レ地、識住_二天童_一。

として『増集続伝燈録』と『枯崖和尚漫録』を併せ引用したかたちでまとめられており、一則の古則公案として取り上げられたことが知られる。しかも『禪苑蒙求拾遺』の「枯禪鏡墮」の末尾には、

鄒_二應傳、枯禪錄の序を撰して曰く、「照子は地に落ち、識にて天童に住す」と。

という興味深い記事が付されている。「枯禪錄の序」とあるのは自鏡が生前になした語録をまとめた『枯禪和尚語録』のことであり、その序文にも如淨示寂の顛末が記されていたものらしい。序文を撰した鄒_二應傳とは、実際には鄒_二應博の誤りであつて、南宋後期の官僚士大夫であつた鄒_二應博のことを指しており、鄒_二應博は『枯禪和尚語録』に序文を寄せたものらしく、「枯禪和尚語録序」には、如淨が示寂する際に照子すなわち宝蓋が地に落ちたこと、その奇瑞によつて自鏡が天童山に住持することになつた経緯などが明記されていたと伝えている。『禪苑蒙求拾遺』一卷は如何なる禪者によつて編纂されたものなのか定かでないが、編者は『枯禪和尚語録』を實際に閲覽することが可能であつたと見られ、そこに鄒_二應博が先の如淨の故事を引用している事実を知り、序文の一句を引用記入したわけであらう。

このように『枯崖和尚漫録』や『禪苑蒙求拾遺』および『枯禪和尚語録』の序文が伝える記事が史実であつたとすれば、如淨は自らの遷化に臨んで後席を先に阿育王山の住持を勤めた前住の道光や阿育王山の現住であつた師範に託することはなく、杭州靈隱寺の住持であつた自鏡を後任に指名したかたちで逝去したことになる。生前の如淨が具体的に自鏡と如何なる道交で結ばれていたのかは定かでないが、密庵咸傑の法を嗣いだ自鏡は如淨よりかなり年長であつたものと見られ、おそらく両者は修行時代に同参であつた経緯なども存したことであらう。

福州府城西南の怡山西禪長慶禪寺の寺志である『西禪長慶寺志』卷二「禪宗志」に、

第二十三代枯禪自鏡禪師。嗣_二密菴傑和尚_一。長溪高氏。嘉定丙子、府主請住_二本山_一。尋遷_二鼓山_一、終_二於天童_一。有_二語録_一行_レ世。という記事が存しており、枯禪自鏡に語録が存したことを伝えている。自鏡は杭州の靈隱寺や明州の天童山に住持する以前に福州(福建省)の西禪長慶寺や鼓山湧泉寺などの禪刹を歴任している。あるいは自鏡ゆかりの長慶寺にはかつて『枯禪和尚語録』が寺内に所蔵されていたものであらう。

自鏡が何年まで天童山の住持を勤めていたのかは定かでないが、『竹溪膚齋十一藁統集』卷二「墓誌銘」の「鼓山

愚谷仏慧禪師塔銘」に、つぎのような記事が伝えられている。

愚谷、名元智。枯禪法子、密菴二世孫也。枯禪道眼高、師初從_レ枯禪於鳳山、叩請甚勤。禪已奇_レ之。去而游方、謁_三浙翁琰於双徑、謁_二少林崧於北山、留掌_レ記有_二声稱_一。少林移_二徑山、枯禪嗣_レ席。師喜曰、青鳳山前事、未竟今竟矣。禪至仍掌記、俄而機契、万境如如。禪移_二天童_一、甫至而寂。師往奠有_レ偈甚悲。其詞曰、擬_レ擊_二春雲_一作_二錢楮_一。伝_二徧諸方_一曰、石屏風又題破矣。

この塔銘は自鏡の法を嗣いだ愚谷元智（仏慧禪師、一一九六—一二六六）の伝記史料であるだけに、自鏡に関してわざわざ重要な内容を伝えている。元智が初めて自鏡に参じたのは鳳山であつたとされるが、鳳山とは福州府城西南の永欽里に存した怡山西禪長慶禪寺のことであり、このとき自鏡は元智の力量を十分に認めていたと伝えられる。その後、元智は遠く杭州餘杭県の徑山興聖万寿寺に赴いて大慧派の浙翁如琰に謁し、ついで杭州錢塘県の北山景德靈隱寺に到つて大慧派の少林妙崧に謁しており、如琰・妙崧の両者のもとでそれぞれ書状侍者を勤めたとされる。宝慶元年（一二二五）に如琰が示寂したのに伴つて妙崧が徑山に勅住すると、自鏡が遠く福建の地から新たに靈隱寺の住持に招かれている。靈隱寺に止まっていた元智は再び自鏡と再会する機会に恵まれており、そのもとで機縁が契つて印可を得ている。問題なのはつづいて「禪、天童に移り、甫めて至りて寂す」と記されていることであつて、如浄が宝慶三年七月一七日に示寂する際につきぎの天童山の住持を自鏡と定めたのであるから、おそらく自鏡は年内には靈隱寺を退董して天童山に迎えられたものと見てよいであろう。ところが、自鏡は天童山に住持してまもなく示寂したもののらしく、天童山での住持期間はきわめて短期に限られていたのであり、元智も自鏡のあまりに早い示寂を悲しんでいる。元智が述べた哀悼のことばに「春雲を撃かんと擬して錢楮と作る」とあるから、おそらく自鏡が示寂したのは宝慶三年の年末か紹定元年（一二三二）初頭のことと推測され、自鏡が天童山の住持であつた期間は数ヶ月にも満たなかつたものと見られる。

『天童寺志』の世代の混乱と晦巖大光

如浄や枯禪自鏡が住持した前後に天童山の住持職がどのように変遷したのかという点、『扶桑五山記』一「天童住持位次」にはつぎのように伝えられている。

三十、無際派禪師。卅一、浄禪師。卅二、枯禪鏡禪師。卅三、晦岩光禪師。卅四、松岩印禪師。卅五、雲臥采禪師。卅六、

癡絶冲禅師。

枯禅自鏡の後席を継いだのが同じ虎丘派の晦巖大光であったことが知られ、大光にとつて自鏡は法叔に当たっている。しかも『扶桑五山記』の記事は、かなり正確に天童山の住持を伝えているものらしく、中世の日本禅林が中国五山の元代中期までの世代をそれなりに伝承していたことが知られる。『正法眼蔵』『梅華』の巻で、道元は本師如浄のことを「先師天童古仏は、大宋慶元府太白名山天童景德寺第三十代堂上大和尚なり」と伝えているが、実際には如浄は天童山の第三一世であったと解するのが正しいであろう。

日本禅林で伝承された『扶桑五山記』の「天童住持位次」が比較的に正しく天童山の歴代住持の変遷を伝えているのに対し、当の天童山ではしだいに世代の正しい順序が不明確になっていったものようである。『天童寺志』巻三「先覚放」の「宋」には、天童山の歴代住持について名を挙げているものの、ほとんど実際の住持位次とは掛け離れた配列となつている。『天童寺志』が編纂された当時、すでに天童山では明確に住持位次を辿ることができなかつたものらしく、禅宗燈史や僧伝などから天童山に住持したことが知られる禅者の名を抽出し、これを大まかに並べるだけのかたちで済ませられている。『天童寺志』巻三「先覚放」には「晦巖光禪師」と題して、

晦巖光禪師。師諱仏光、晩号東谷、嗣華藏祚、住天童。上堂、藏身処没蹤迹、無影樹頭靈鳥宅、没蹤迹、処莫藏身、不萌枝上春華坼。有二来由誰辨的。天曉西風弘弘吹、松釵一徑爭拋擲。有舍利塔于中峰下別山禪師塔左。

という大光に関する記事が載せられている。この記事には二重の誤りが見られるのであつて、この中で正確と見られる記載は「晦巖光禪師」という道号・法諱の箇所と「有舍利塔于中峰下別山禪師塔左」という舍利塔（墓塔）が建てられたという文面のみであり、これに全く別人の記事を挿入したがためにその他は全く信用の置けない内容となつている。まず第一に天童山内ではもともとこの人の名を「晦巖光禪師」と伝えていたことが知られ、道号は晦巖と伝え、法諱は□光と記され、この点は正しい表記が天童山で長らく伝承されていたことを物語っている。ところが、つぎに「師、諱は仏光」としてこの人の法諱を「仏光」と記しているのは明らかな誤りであり、その背景にはすでに触れたごとく同世代の若干後輩に当たる天台宗の晦巖法照が仏光法師という勅賜号を得ているのと混乱していたことが挙げられよう。

『続仏祖統紀』巻一「法師法照」の章によれば、法照が明州府城の南湖延慶教寺に住持していたときの出来事として、
育王虚席、郡請兼住。辞曰、自梁隋已降、達磨・智者、各有宗承。拳痴絶冲一自代。

という記事が存している。一時期、阿育王山が住持の席を欠いたとき、天台宗の法照は郡守（明州府主）より禅寺である阿育王山広利禅寺に兼務せんことを求められている。しかしながら、このとき法照は延慶教寺の住持が阿育王山に住持することなどできないとして、天童山景德禅寺の住持であった癡絶道冲に兼務の座を譲っている。このように天台宗の法照が阿育王山ないし天童山に住持することなど当時としてはあり得ないのであり、しかも法照が天童山の道冲を阿育王山の兼務に推挙したのは大光が示寂してしばらくして以降のことである。ちなみに道冲が兼務する以前に阿育王山の住持を勤めていたのは、時期的に楊岐派の癡鈍智穎の法を嗣いだ大夢徳因であったと見られる^②。

第二に「晩に東谷と号し、華藏祚に嗣ぎ、天童に住す」として晦巖光が晩年に東谷と号し、華藏祚に嗣いだと伝えている記事も全くの誤りであり、これは明らかに常州（江蘇省）無錫県西三六里の華藏褒忠顕親禅寺の住持であった曹洞宗宏智派の明極慧祚（法祚とも）に参じて法を嗣いだ東谷妙光（？—一二五三）のことを大光と見誤った混乱によるものにほかならない。東谷妙光は天童山中興一六世の宏智正覚の法孫であつて、

天童宏智正覚—浄慈自得慧暉—華藏明極慧祚—靈隠東谷妙光

という宏智派の法統を嗣続した曹洞禅者なのである。しかも『天童寺志』「先覚攷」の「晦巖光禅師」の項に取り上げられた上堂も、実際には『五燈会元統略』卷一上「東谷光禅師」の章や『五燈全書』卷三〇「東谷光禅師」の章に、妙光がなした上堂語として載せられている内容であり、到底、大光のものとして採用することなどできない。そのもとは『禅宗頌古聯珠通集』卷一七に「船子藏身没蹤跡」の古則に対して妙光がなした作として、

藏_レ身_レ处_レ没_二蹤跡_一、無影樹頭靈鳥宅。没_二蹤跡_一、处_レ莫_レ藏_レ身、不萌枝上春花折。有_二来由_一誰辨的。天曉西風_レ払_レ吹、松_レ釵_レ一_レ徑_レ争_レ抛_レ擲。

とあるのを大光のものとして採用したにすぎない。いずれにせよ、後世の禅宗燈史においては、天台宗の晦巖法照や曹洞宗の東谷妙光に関する記事をなぜか臨濟宗虎丘派の晦巖大光のものとして勘違いして繋ぎ合わせて載せたものにすぎず、何ら信用することのできない記載内容となっている。

無準師範と天童山の大光

すでに述べたごとく虎丘派の枯禅自鏡が宝慶三年（一二二七）の年末か紹定元年（一二二八）の春に天童山の現住と

して示寂したとすると、つぎの住持となった大光は紹定元年内には新たに天童山の住持に迎えられたものと見てよいであろう。宝慶三年春から夏の頃に無準師範が阿育王山の住持として新たに就任しており、その時点ではすでに大光は阿育王山の住持を退いていたことが知られる。紹定元年の春より以降に新たに大光が天童山の住持に迎えられたとすると、およそ一年間にわたって大光が如何なる立場にあったのが定かでないことになる。この間、おそらく大光は阿育王山の山内に存したゆかりの堂宇に身を寄せ、しばし隠山閑居していたのではなからうか。いずれにせよ、このとき阿育王山では住持が大光から師範へと移行しており、一方、天童山では住持が如浄から自鏡さらに大光へと短期間に移行していたわけである。その後、数年間にわたってしばらくの間は阿育王山に師範がおり、天童山には大光があつて、それぞれ明州内の五山の住持として化導を敷いていたことになる。

大光が天童山に住持していたときになした活動の一端については、きわめて史料が限られているものの、僅かながら貴重な消息が伝えられている。すなわち、それまで阿育王山の住持であつた無準師範が紹定五年（二二三二）の秋には大慧派の少林妙崧（妙嵩とも、仏行禪師、？—一二三二）の後席を継いで径山に勅住している。このとき師範の後席を継いで阿育王山に住持したのは嗣承未詳の石堂□明であつたとされるが、あるいは楊岐派の大夢徳因であつたのかも知れない。³⁵この後、師範は径山の住持として実に二〇年近くにわたって活動し、門下に日本僧の円爾（辨円、聖一国師、一二〇二—一二八〇）を得るなど、日中間の禪宗の交流にも大きな足跡を残している。

第一に天童山の太光の活動を伝えるものとして、『仏鑑禪師語録』巻二「住臨安府径山興聖万寿禪寺語録」に、

天童晦巖和尚至上堂。同_レ身共_レ命、同_レ氣連_レ枝、阿難合掌、迦葉揚_レ眉。就_レ中一句子、不_レ許_二外人知_一。且道、因_レ甚如_レ此。嘗裏天王。

という上堂が収められている。師範は少林妙崧の後席を継ぐかたちで径山に陞住しており、入寺した時期は紹定五年秋のことであり、この上堂がなされたのは上堂語の配列からして同年冬か、紹定六年（二二三三）春の頃であつたと推測される。³⁶師範が径山に住持してまもない時期に、大光は天童山の住持として遠く径山に赴いて師範のもとを訪れて旧交を温めているわけである。大光が天童山に住持したのが紹定元年であつたとすると、このとき大光はすでに天童山に住持して六年目を迎えていたことになる。ところが、大光が訪れた直後の紹定六年四月に径山が火災で焼失しており、師範は復興のために諸方に勧募に訪れる厳しい状況に追い込まれている。³⁷

師範は「天童の晦巖和尚至る上堂」において「身を同じくし命を共にし、氣を同じくし枝を連ぬ」と述べており、また一方で「阿難は合掌し、迦葉は眉を揚ぐ」と語っている。こうした表現からすると、師範と大光は単に法系的に従兄弟の間柄に当たっていたのみでなく、同じ蜀僧として地域的にもかなり近い出身ではなかったかと推測されるのであつて、自らを阿難陀に譬えるとともに、大光を摩訶迦葉に比している。しかも「就中の一句子、外人の知るを許さず」と記し、他人には窺い知れない両者のみが捉え得る一句があることを強調している。かつて阿育王山の住持を大光が師範に譲っているのも、ここで天童山の住持であつた大光が遠く径山の師範を訪ねているのも、両者の親しい道交に基づくものである。あるいは径山の回禄に対しても、大光は直ちに天童山から何らかの支援を行なっているのかも知れない。

天童山の太光に参じた虚舟普度

いま一つ天童山の太光の動静を伝える史料として『虚舟和尚語録』卷末「行状」が存しており、「行状」によれば、松源派の虚舟普度（一一九一—一二八〇）が本師である無得覚通に参学して印可証明を受けた後の記事として、

居数年辞_レ通、以_二所得_一質_レ当世。天童晦巖光、大慈石巖璉、虎丘石室迪、一見器異、為_レ不_レ可_レ及、因留典_二法務于三師間_一。という事跡が伝えられている。普度は楊州（江蘇省、江都の史氏の出身であり、慶元五年（一一九一）に出生している。十二歳で郡の天寧寺に投じ、その後、杭州錢塘県に赴いて浄慈寺で大慧派の少林妙崧に参じて剃髪し、靈隠寺で大慧派の鉄牛心印に参じており、その後、本郡東堂院の祖信のもとで受戒している。さらに無得覚通が松源崇嶽の道を饒州（江西省）鄱陽県の東湖薦福禪寺に振っていることを聞いてその門下に列し、衡陽（湖南省）衡山県の南嶽福巖禪寺や常州（江苏省）無錫県の華藏褒忠顕親禪寺に隨身している。数年間を覚通のもとで過ごしたが、やがて普度は自らの所得を当世の諸禪者に質すべく諸方の叢林を経巡っている。普度が覚通のもとを離れた時期が何時であつたのかは明確でないが、諸山歴遊の最初に参学したのが天童山の太光であつたわけであり、さらに明州鄞県の大慈山教忠報国禪寺において法叔の石巖希璉に参学し、蘇州（江蘇省）呉県の虎丘山雲巖禪寺にて嗣承不詳の石室□迪にも随侍している。ところが、『増集統伝燈録』卷四「杭州径山虚舟普度禪師」の章では、普度が天童山で太光に学ぶ機会を得た事跡について、

若_二天童晦谷光・大慈石巖璉・虎丘石室迪、一見器異、留典_二法務_一。

と書き残しており、ここでは普度が天童山で参学した禪者の名を「晦巖光」ではなく、「晦谷光」と伝えている⁽⁸⁾。状況

からして晦谷光は明らかに晦巖光であつて、大光のことを指している。晦谷光という表記に関しては次項で問題とするものの、普度は本師無得覚通のもとを辞して直ちに天童山の大光のもとに投じていることから、予め大光の徳風を慕うかたちで天童山に到つたものであろう。いずれにせよ、普度は天童山の太光と大慈寺の希璉と虎丘山の石室迪（迪とも）のもとに参じてともに器重されたのであり、「行状」に「一見して器異し、及ぶべからずと為し、因りて留まりて法務を三師の間に典る」とあり、『増集続伝燈録』に「一見して器異し、留まりて法務を典る」とあるごとく、普度は大光ら三師にその器量を認められ、彼らのもとで法務を掌つたと伝えている。法務とは仏法に関する行務のことであり、おそらく普度は天童山の太光らのもとで頭首（西班）などの職位に就いたものであろう。ちなみに石巖希璉は松源崇嶽の高弟であり、明州の大慈寺に住持する以前には同じ明州鄞県の大梅山護聖禪寺に住持しており、道元が諸山歴遊の帰途に護聖寺に立ち寄つた際に住持であつた禪者と見られる。

『虚舟和尚語録』巻末の「行状」によれば「淳祐初、制府趙信菴、以「建康半山」敦請出世。挙「香嗣」無得」とあるから、その後、普度は淳祐年間（一二四一—一二五二）の初めに制府の趙以夫（信庵）の懇請によつて建康府（南京）府城東の半山報寧禪寺に開堂出世し、無得覚通に嗣承香を焚いて松源派の臨濟禪者として活躍することになる。したがつて、普度が天童山で太光に参学したのはそれ以前ということになり、おそらく紹定年間（一二三二—一二三三）から端平年間（一二三三—一二三六）にかけての頃ではなかつたかと推測される。

『江湖風月集』の晦谷光和尚について

ところで、『増集続伝燈録』の虚舟普度の章で、普度が参学した禪者の名が「天童晦谷光」と記されていることと、無準下の松坡宗翹が南宋末期に編集した『江湖風月集』巻上に「西蜀晦谷光和尚」として同名の禪者名の偈頌が収められている点が問題となる。『江湖風月集』によれば、西蜀（四川省）出身の禪者として晦谷□光という同名の禪者が存しており、この人に関しては何らほかに事跡が伝えられていない。『江湖風月集』巻上の「西蜀晦谷光和尚」の項には「贈「鐘樓匠人」」「政黄牛」「誦「捷書」」という三首の偈頌が載せられている。「西蜀晦谷光和尚」の項に載せられる三首の偈頌の全文を示すならば、

贈「鐘樓匠人」

笑庵了悟と晦巖太光（佐藤）

大匠曾無_レ可_レ棄材_一、胸中自有_二樓臺_一、是誰敲動黃昏月、不_レ覺和_レ声送出来。

政黄牛。

只知_二牛瘦角不_レ瘦、不_レ覺_二心高句亦高_一、行到_二六橋煙雨外_一、綠蒲蠶盡風騷。

讀_二捷書_一。

關外安危策已成、全鋒不_レ戰屈_二人兵_一、帰来両眼空_二寰宇_一、一曲琵琶奏_二月明_一。

というものである。最初の作は鐘楼を作る工匠に贈った偈頌であり、つぎの作は法眼宗の浄土惟政（惟正とも、政黄牛、九八六一〇四九）に対する仏祖賛であり、最後の作は捷書すなわち戦勝の報告書を読んで詠じた偈頌である。残念ながら『江湖風月集』に載る西蜀出身の晦谷光が如何なる系統の法を嗣いだ禅者であったのか、いずれの禅刹に住持したのかは何ら記されていない。

この点、『江湖風月集』の注釈書では、なぜか晦谷□光を概ね破庵派の無準師範の法を嗣いで明州鄞県西南一二〇里の仗錫山延勝禅寺に住持した晦谷□彰のことであると解している。しかしながら、晦谷光はあくまで□光という法諱であつて、□彰という法諱ではないのであり、光と彰とは明らかに法諱の下字としては相違しており、同一人と解するにはかなり無理が存しよう。『江湖風月集』という晦谷光と『増集続伝燈録』という晦谷光とが同一人物を指し、しかも晦巖光ないし晦岩光の誤記で大光のことを意味しているのであれば、大光は無準師範らと同じく西蜀（四川省）の出身で、若くして長江を下つて江浙に到り、蘇州の靈巖寺や杭州の靈隱寺で笑庵了悟に参学して法を嗣いだことになる。あるいは『江湖風月集』という晦谷光と『増集続伝燈録』という晦谷光が全く別人なのかも知れないが、一方で大光が晦巖・晦岩という道号のほかには晦谷とも称したのか、単なる谷と岩の誤写であつたとも取れよう。

晦巖大光の墨蹟と頂相

晦巖大光も当然のことながら生前に多くの墨蹟を揮毫し、頂相の自賛なども残していたはずであり、それらのいくつかは鎌倉・南北朝期の日本禅林にも将来された可能性が存しよう。つぎにこの大光自筆の墨蹟や大光にまつわる頂相について一考を試みることにしたい。

江戸初期に大応派（大徳寺派）の江月宗玩（欠伸子、赫々子、一五七四—一六四三）がまとめた墨蹟の鑑定日録『墨蹟之写』

には、珍しくも大光が揮毫した墨蹟のことが記されている。すなわち、竹内尚次『江月宗玩墨蹟之写（禅林墨蹟鑑定日録）の研究』上の「元和四戊午年、三冊之内中」には「絹本布袋和尚図画賛」として、

下生弥勒仏、徒靠布袋遊、開口仰天咲、活機在杖頭。

天童比丘大光賛。「方印」「方印」

という天童山の日光が撰した賛が載せられており、さらに賛の下段には、

六月廿三日、堺ヨリ来候、立取次、布袋ノ賛、絹、印不分明、字不分明、何共不知候。

という注記も付されている。この画賛は元和四年（二六一八）六月二三日に和泉（大阪府）の堺の地から齎されたものらしく、立とは宗玩の法を嗣いだ江雪宗立（不如子、大綱智海禅師、一五九五—一六六六）のことを指しており、宗立が取り次いで宗玩に鑑定を願ったことが記されている。天童山の日光が揮毫したのは絹本の「布袋和尚図」に対する画像賛であったが、宗玩の注記によれば、落款がかなり不鮮明で判読し難い状態であったことが知られる。おそらく推測するに、二種の方印の落款とは、一つが「晦巖」ないし「晦岩」であり、いま一つが「日光」であったものと見られるが、宗玩としては中国禅宗史上にほとんど名を留めない日光が如何なる禅者であったのかは把握していなかったことであろう。いずれにせよ、この画像賛は大光が天童山の住持であったときに揮毫したものであるから、南宋の紹定年間から端平年間の頃に書かれたはずであり、大光のことは伝えてある点できわめて貴重な作であったといつてよい。

この大光賛「布袋和尚図」は何らかの因縁でおそらく鎌倉・南北朝頃には日本禅林に将来されていたものと見られ、大光が道元ゆかりの禅者でもあるだけに、単に臨済宗のみでなく曹洞宗にとっても珍重すべき墨蹟であったはずである。しかも少なくとも大光賛「布袋和尚図」は江戸初期まで四〇〇年近くにわたって日本国内に伝存していたことが知られ、現在、所在が確認されないのが惜しまれる作といつてよい。今後、この大光賛「布袋和尚図」が発見されるようなことでもあれば、大光の揮毫した筆蹟や使用した落款なども仰ぎ見ることができるとも知れない。

田山方南編『禅林墨蹟拾遺』の九には、湯木家蔵「癡絶道冲墨蹟、晦巖語」として、

脱「皮膚」実不存、視之無見聽無聞。從教永劫沈淪去、不入如来解脱門。

道冲筆于晦巖語之後。「玉山」「癡絶」「沙門道冲」

という曹源派の癡絶道冲の墨蹟が載せられている。識語の部分で道冲は「道冲、晦巖の語の後に筆す」と述べているから、

先に晦巖が揮毫した墨蹟が存し、それに和韻するかたちで道冲が書き記した墨蹟であることが知られる。問題は「晦巖」が例のごとく晦巖法照のことを指しているのか、晦巖大光のことを指しているのかが定かでない点にある。田山方南氏は『禅林墨蹟拾遺解説』の「九、癡絶道冲墨蹟」で、ここにいう晦巖を仏光法師すなわち晦巖法照と解して問題を付している^⑤。しかしながら、道冲の墨蹟はあくまで青原下の薬山惟儼（弘道大師、七四五—八二八）の「薬山皮膚脱落」の公案や、惟儼の師である石頭希遷（無際大師、七〇〇—七九〇）の「永劫沈淪」の語句を踏まえてなされているから、天台僧法照の語に和韻した作と見るより、道冲が入寺する直前まで天童山に住持していた禅僧大光の語に和韻したものと見る方が無難ではなかるうか。道冲にとつて大光は同世代の禅僧であり、法照は若干ながら後輩に当たると見る方が妥当なのである。

また元代に活躍した大慧派の元叟行端（慧文正辯仏日普照禅師、一二五五—一三四一）も『慧文正辯仏日普照元叟端禅師語録』巻八「題跋」において、

跋^⑥大慧・癡絶・天目・偃谿・晦巖・断橋・象潭・叔凱諸老墨跡^⑦。

新州樵者、倩^⑧童子^⑨書^⑩壁、光明至^⑪今、如^⑫日月麗^⑬天。吾宗諸老、非^⑭在^⑮筆墨畦徑間^⑯、昭昭矣。大慧起^⑰濟北於將^⑱仆、香水海為^⑲口、蘇迷盧為^⑳舌、亦莫^㉑称^㉒揚^㉓万^㉔一。癡絶見^㉕曹源^㉖、天目見^㉗松源^㉘、其法中伯仲也。偃谿・晦巖・断橋、同時鼎立、今皆有^㉙児孫^㉚一抛^㉛雄席^㉜。象潭^㉝普典^㉞、惠嚴^㉟破院^㊱、欲^㊲聚^㊳泥団^㊴、聴^㊵法、而泥団亦無。叔凱^㊶苦吟、師浪僂而不^㊷及者、九皋集今在焉。という諸禅者の墨蹟に対する題跋を残している。新州樵者すなわち新州（広東省）出身の六祖慧能（盧行者、大鑑禅師、六三八—七二三）にまつわる祖師図に諸禅者が寄せた墨蹟に対して元叟行端が付した題跋である。もともと大慧派祖の大慧宗杲（妙喜、大慧普覺禅師、一〇八九—一一六三）が最初に揮毫したものであるが、そこに曹源派の癡絶道冲と松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）が賛語を寄せ、また大慧派の偃谿広聞（仏智禅師、一一八九—一二六三）や破庵派無准下の断橋妙倫（松山子、一二〇二—一二六〇）とともに晦巖大光も賛語を寄せており、その後も松源派の象潭濡泳と嗣承未詳の叔凱という禅者が賛語を寄せたとされる。ただし、ここにいう「晦巖」が広聞や妙倫と同時に鼎立したとすると、大光ではなく天台宗の晦巖法照であったとも解されよう。一方、三者が共に禅僧であったとするならば、広聞や妙倫よりかなり年長に当たると見ることも可能なのである。また濡泳と同じ頃に賛を寄せた叔凱については如何なる禅者か定かでないが、叔凱には『九皋集』という詩文集が存したとされる。

さらに日本の南北朝期に夢窓派の義堂周信（空華道人、一三二五—一三八八）が主に宋元の禅僧たちの偈頌を編集した『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上「祖塔」に、

智者塔。 晦岩（宋人）。

古仏曾來招_レ手地、隋唐靈樹死還生、衆山低処雲如_レ海、人向_二蒼龍背_一上行。

という偈頌が載せられている。この偈頌は『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一「礼塔」にも「晦岩（岩下一本注有_二宋人二字_一）」の「知（一作）智者塔」として載せられている。これが大光の作であれば、貴重な偈頌ということになるが、単に「宋人」とあるのみで大光を指しているとは断定できない。智者塔とはいうまでもなく天台宗の開祖である天台智顛（徳安、智者大師、五三八—五九七）の墓塔のことであり、台州（浙江省）天台山中の天台県北二三里に存した定慧真覺塔院のことを指している。このため晦岩が大光のことではなく、天台宗の晦巖法照のことではないかとも解されるが、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』ないし『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』が概ね南宋から元にかけての禅僧が詠じた偈頌を集めたものである点を踏まえれば、この「智者塔」の偈頌は大光の作であった可能性も存しよう。

ところで、鎌倉の瑞鹿山円覚興聖禅寺に存する仏日庵には、重要文化財の『仏日庵公物目録』が所蔵されているが、その中の「諸祖頂相」に「晦岩（石帆贊）」という記事が残されている。仏日庵は円覚寺の開基で鎌倉幕府第八代執権である北条時宗（法光寺殿道果、一二五一—一二八四）を祀る廟所（塔頭）であり、『仏日庵公物目録』は法清という禅者が北朝の貞治二年（南朝の正平一八年、一三六三）四月に作製したものである。「晦岩（石帆贊）」とあるから、松源派の石帆惟衍（？—一二七二？）が贊を付した「晦岩」の頂相であり、実際に南北朝期に仏日庵にこの画贊が収蔵されていたことが知られる。

石帆惟衍は松源派の運庵普巖（少瞻、？—一二三三または一二五六—一二二六）の法を嗣いだ高弟であり、同門の法兄には虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）が存している。この「晦岩（石帆贊）」についても、やはり晦巖大光の頂相に寄せた贊であったのか、天台宗の晦巖法照に寄せた贊であったのかは定かでない。ただ、『仏日庵公物目録』の「諸祖頂相」の箇所収められていることから、禅僧の頂相と見るのが自然であり、大光の肖像画に惟衍が贊を寄せたものと解しておきたい。この点は惟衍が法照より先に示寂しているものと見られるから、生前に惟衍が天台宗の法照の寿像頂相に贊を寄せたと見るよりも、亡き大光の頂相に贊を揮毫したと解する方が妥当であろう。惟衍の本師である普巖は

大光とは法の従兄弟に当たっており、あるいは惟衍自身もかつて阿育王山か天童山で大光に参学するような機会が存したのかも知れない。付け加えるならば、惟衍自身も最晩年に天童山に住持しており、しかも法嗣の西潤子曇（大通禪師、一二四九—一三〇六）は二度にわたって日本に渡来し、鎌倉禪林に化導を敷いていることから、惟衍が贊を付した「晦岩」の頂相を日本に招来したのが法嗣の子曇であった可能性も高いであろう。いずれにせよ、大光の墨蹟のみでなく、大光の生前のすがたを画いた頂相がかつて日本禪林に将来され、円覚寺山内の仏日庵に所蔵されていたらしいことが知られるわけであり、それらがともに現今に伝えられていないことが誠に惜しまれてならない。

大光の示寂と虚舟普度

大光が示寂したのが何時であったのかは定かでないが、およそ紹定年間（一二三二—一二三三）の末頃から端平年間（一二三三—一二三六）にかけての頃ではなかったかと推測される。すでに触れたごとく『明州阿育王山統志』巻六「先覚攷（補遺）」には「第三十二代、晦巖光禪師。八月十二日忌」と記されているから、これが正しい伝承とすれば、大光が示寂した忌日は八月一二日であったことになる。大光が具体的に何年の八月一二日に示寂したのか、そのとき世寿が何歳であったのか、といった点は残念ながら定かでない。

この点で注目すべきは、かつて天童山の太光に参学した松源派の虚舟普度が『虚舟和尚語録』「偈頌」において、

悼^三天童晦巖和尚^一。

恩怨重重分未^レ分、再来不^レ見^三旧時人^一、娟娟宿鷺亭前月、忍^レ照^三西風吹^二白蘋^一。

という偈頌を残していることであり、この偈頌は『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中「哀悼」に「虚舟」の「天童晦岩禾上」として、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一〇「哀悼」にも「虚舟」の「天童梅岩（岩下一本有^二禾上^一二字^三）」としてそれぞれ載せられている。⁽⁴⁸⁾この偈頌は普度が参学の師であった太光の示寂を悼んでなした貴重な作であることから、内容を書き下しておきたい。

天童の晦巖和尚を悼む。

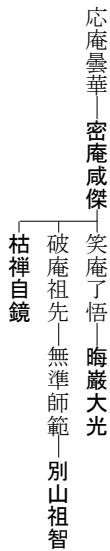
恩怨は重重たり、分つに未だ分てず。再び来たるに旧時の人を見ず。

娟娟たる宿鷺、亭前の月。西風が白蘋に吹くを照らすを忍ぶ。

この偈頌が『虚舟和尚語録』の「上堂」の箇所ではなく「偈頌」の箇所に存していることから、普度が禅刹に開堂出世する以前に詠じたものである。大光が示寂した時点では、いまだ普度は諸禅者のもとを歴参していた時期と見られ、このため「再び来たるも旧時の人を見ず」と述べたものである。ちなみに『虚舟和尚語録』巻末「行状」によれば、
淳祐初、制府趙信菴、以^三建康半山、敦請出世、拳^レ香嗣^二無得^一。

とあり、『増集続伝燈録』巻四「杭州径山虚舟普度禅师」の章や『補続高僧伝』巻一一「虚舟度伝」でも「淳祐初、制府趙信庵、以^二金陵半山^一請^二出世^一」と伝えられている。これらによれば、普度は淳祐年間（一二四一—一二五二）の初めに頃に制府の趙以夫（信庵）の請によって建康府（南京）府城東の半山報寧禅寺に出世開堂していることが知られ、このとき松源下の無得覚通を本師と仰いでに嗣承香を焚いている。大光が天童山で示寂したのはこれより数年以上は以前のことであり、哀悼の偈頌の中で「再び来たるに」と述べているから、おそらく普度は大光の示寂を聞き知って再び天童山に赴き、かつて参学した大光のことを偲んで一偈を詠じたものであろう。また「恩怨は重重たり」とあるから、普度は大光に対する深い法恩を重んじながらも、再び往時の大光の姿を拝することができなくなったのを惜しんでいる。

すでに触れたごとく『天童寺志』巻三「先覚攷」の「宋」の「晦巖光禅师」の箇所には「有^二舍利塔于中峰下別山禅師塔左^一」と記されているわけであるが、この点は同じく『天童寺志』巻七「塔像攷」にも「晦巖光禅师舍利塔、在中峰之麓」と記されている。おそらくかつて大光の墓塔は破庵派無準下の別山祖智（智天王、一一二〇—一二六〇）の墓塔と並ぶかたちで天童山の中峰の麓下に存したものであろう。南宋代には天童山の中峰には大光の墓塔のほかに、大光の法祖に当たる虎丘派の密庵咸傑の「密菴傑禅师塔」があり、大光の法叔に当たる虎丘派の枯禅自鏡の「枯禅鏡禅师塔」があり、大光の舍利塔が立てられた後には、破庵派の別山祖智の「別山智禅师塔」も立石されたことが知られる。これら天童山の中峰に墓塔が立てられた密庵咸傑・枯禅自鏡・晦巖大光・別山祖智という四禅者の法系を系図で示すと、つぎのような法脈関係になる。



このように天童山の東方、古天童の東谷庵に向かう途中の中峰には、密庵咸傑とその門流の禅者たちの墓塔が建立さ

れ、塔頭として中峰庵が存したことが知られている。おそらく大光は生前から自らの墓塔を法統の祖父である咸傑が眠る中峰に立てることを望んでいたものと見られ、大光の前住であった自鏡の墓塔とともに大光の墓塔が中峰に立てられたわけである。天童山の歴住世代でいうと、第二一世の密庵咸傑、第三二世の枯禅自鏡、第三三世の晦巖大光、第四〇世の別山祖智という諸禪者の墓塔が一同に立石されていたことになろう。

天童山に現存する晦岩光禪師舍利塔

しかも注目すべきは、辻俊和「天童寺・阿育王寺・保国寺の石像物」（山川均編『寧波と宋風石造文化（東アジア海域叢書10）』に所収）の「天童寺の石造物」によれば、明州鄞県の天童山すなわち寧波市鄞州区五郷鎮の天童寺には、現在、中心伽藍である大雄宝殿の東側の僧房前の庭に「宋密庵咸傑禪師之塔」の無縫塔とともに、葉脈に「宋晦岩光禪師舍利塔」と彫られた無縫塔が現存していることが報告されている。密庵咸傑は大光にとって師翁に当たる禪者であり、両者の墓塔は八〇〇年もの風雪に耐えて現今に残されていたことになろう。

密庵咸傑の墓塔については『密菴和尚語録』卷末「塔銘」に、

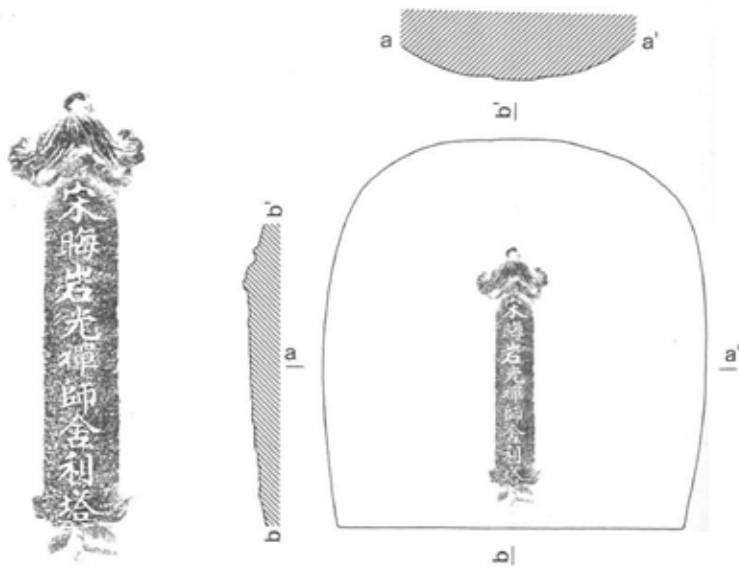
淳熙四年、有旨住徑山。（中略）七年、自徑山遷靈隱。（中略）十一年、歸老于天童。十三年六月、忽示微疾。十二日、趺坐而逝。年六十有九。臘五十有二。葬于寺之東。

と記されており、咸傑の遺骨が天童山の寺の東に葬られたことを伝えている。一方、『続伝燈録』卷三四「慶元府天童密庵咸傑禪師」の章や『増集続伝燈録』卷一「四明天童密菴咸傑禪師」の章では「未幾、詔住徑山・靈隱、晚居太白。（中略）後示寂、塔于寺之中峰」と記されており、咸傑が示寂した後、天童山（太白）の寺の東方、中峰の地に墓塔が立てられたことを伝えている。したがって、現在、天童寺内の僧房の庭に置かれている「宋密庵咸傑禪師之塔」はもともと寺の東方、中峰の一隅に立てられていたものを寺内に移したものと解される。

関野貞・常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』（龍吟社刊）の「天童山・育王山」の「古天童」の箇所によれば、かつて天童山の東谷庵には「第十六代宏智覚仏塔」と題する曹洞宗の宏智正覚の無縫塔も存し、写真にも収められているが、現在、その所在は定かでない。東谷庵には正覚の墓塔のほかにも天童山の歴代住持を勤めた十尊宿の木像や無縫塔が存して「東谷塔林」と称されていたが、すでに破壊されて現在は新たに再建されたものに改められている。



晦岩光禪師無縫塔



晦岩光禪師無縫塔蓮牌形拓影 (S=1/5)

晦岩光禪師無縫塔実測図 (S=1/10)

一方、先の「宋密庵傑禪師之塔」と並んで東側僧房前の庭に置かれた「宋晦岩光禪師舍利塔」も当然のことながら密庵咸傑の墓塔とともに中峰の一隅に存していたはずであり、両者の墓塔は近年になって同時に天童寺内に移されたものである。辻俊和氏の論考には「晦岩光禪師無縫塔」の写真とともに「天童寺無縫塔実測図」と「晦岩光禪師無縫塔蓮牌形拓影」が載せられている。本稿でも辻氏の許可を得てその写真と実測図をそのまま掲載しておきたい。塔身は丸みをもった卵形であり、高さ五三・七センチ、最大径は五二・四センチとなっている。塔身の正面には荷葉蓮台牌形を薄肉彫りして「宋晦岩光禪師舍利塔」と陰刻しており、辻氏は「宋密庵傑禪師之塔」とともに塔身は同じく南宋代に造立された無縫塔と推定しているが、他の部分に関しては後代の補修であろうと結論付けている。

大光の後住として天童山に住した松巖印

ところで、先の『扶桑五山記』一「天童住持位次」によれば、大光が天童山にて遷化して後、後席を継いで第三四代の住持に就任したのは松巖□印（松岩□印とも）という禪者であったとされる。この人は大慧下の遯庵宗演の門流に連なっていたものらしく、大慧派の北磻居簡（敬叟、一一六四—一二四六）の『北磻文集』卷九「疏」には「印老住天童、州府・山門・諸山三疏」として松巖印が天童山に住持する際に居簡が作成した三つの疏文が収められている。「印老住天童」の疏に載る「山門疏」には、

名徹_二前朝、得_三松巖之奎画、道参_二中貴、服_三稻畛之金襴。道人分上、安用_二多般。明眼人前、不_レ直_二一笑。某人、勅住_二天竺、勅帰_三天童。静退_二于演通菴、機尤峭峻、遭_二逢如清道者、寵更_三光華。攬谷成_レ陰、睦州担_レ板、仏燈珣後、仏燈印又聯芳、事法界中、事法門当_二再振。〈右山門疏〉。

という文が収められており、この「山門疏」は『禪儀外文集』卷上「疏」にも「印老住天童」として引用されている⁽³⁾。松巖印は初め大慧下の遯庵宗演に参じ、後に清道者という人のもとに投じて印可を得たものらしい。清道者については具体的な嗣承が定かでないが、おそらく宗演の法を嗣いだ月窟慧清のことを指しているものと見られる。慧清は湖州（浙江省）烏程県南西一四里の何山移忠禪寺に住持しているが、何山といえは五祖門下の太平慧懃（仏鑑禪師、一〇五九—一一一七）の高弟である何山守珣（珣罵天、仏燈禪師、一〇七九—一一三四）が化導を敷いた道場として知られる。松巖印もあるいは本師慧清の後席を継いで何山に住持した因縁が存したのかも知れず、仏燈守珣の法門を再び盛んにし

た点が称えられている。松巖印は杭州錢塘県の中天竺三寿永祚禪寺の住持を久しく勤めていたものらしく、勅請により天童山に入寺しているが、おそらくこのとき天童山の光大より遺書などが至って後事を託されているものである。

その後、松巖印が隠閑ないし示寂した後、後席を継いで天童山に住持したのが曹源派の癡絶道冲であり、『癡絶和尚語録』巻上「慶元府天童景德禪寺語録」によれば「嘉熙三年己亥十月初三日入院」とあるから、道冲は嘉熙三年（一二三九）一〇月三日に天童山に第三五代住持として入院している。

おわりに

以上、虎丘派の笑庵了悟と晦巖光大について限られた史料を通してその事跡を整理考察したわけであるが、とくに大光について明確なのは阿育王山と天童山に住持していた期間に限られる。禪宗五山の中で明州（後世の寧波）に存する二大刹に住持しながら、大光の事跡がほとんど判明していないのは如何にも残念である。奇しくも大光が阿育王山に住持していたときに参学する機会を得た日本僧道元ですら、大光の事跡については一切触れず、大光に対する印象もきわめて薄かったといつてよい。天童山の如浄からも大光は好印象を持たれておらず、悪しき宋朝禪者の代表のごとく扱われている。ただ、そんな中で注目されるのが破庵派の無準師範との関わりであつて、大光の後席を継いで師範は阿育王山に住持している。また天童山に住持した大光も、後に自ら徑山に赴いて師範を訪ね、両者は旧交を温めている。おそらく大光は師範と同じ蜀僧であり、法系上においても師範は大光の法従弟に当たっており、そうした縁故で両者は親しい道交をなしていたものと見られる。

そんな大光の墓塔が天童寺の一隅に「宋晦岩光禪師舍利塔」として現存していたことは驚きであり、八〇〇年近い歲月を経て我々の眼に触れた事実にかわめて興味深いものを覚える。大光の墓塔について『天童寺志』や『阿育王山志』など寺志類に示寂年時や郷関など何らかの記載が残されていたならば、大光の事跡はいま少し判明し得たはずであろう。禪宗燈史や僧伝類に伝記が載せられていない埋もれた禪者の事跡は容易に判明し得ないものが存する。幸い大光に関しては若干ながら個別の史料が存し、墓塔も発見紹介されたことから、種々の考察が可能となつたわけである。

天童山で如浄が示寂した後、如浄門下の無外義遠（？―一二六六）らは『如浄和尚語録』の編纂に乗り出しているが、このとき何故か天童山現住の光大に対して校訂や序跋などを依頼することがなかった。如浄門下の人々は『如浄和尚語

録』を編集し、杭州靈隱寺の住持であった楊岐派の高原祖泉と越州山陰県の法華山天衣寺の住持であった嘯巖文蔚に跋文を依頼しており、語録自体の校勘も祖泉が行なっている。おそらく『如浄和尚語録』は枯禪自鏡が天童山住持を勤めていた間に編纂が進められ、自鏡が示寂した直後、如浄門下の人々は靈隱寺の祖泉や天衣寺の文蔚を頼ったものであろう。そこに新たに天童山の住持となった大光の名が見られないのは如何にも残念であり、もし大光が『如浄和尚語録』に何らかの関わりをなしていたならば、道元の大光に対する評価も少しは変わっていたのではなからうか。

また天童山で道元とも親しかつた書記の道如という禅者は、癡絶道冲が天童山に住持した際にも参学して道冲から法語を得ている。道冲は如浄が示寂して一〇年以上を経て天童山に入寺しているが、その間、道如は天童山に留まっていたのであろうか。如浄が示寂して後も、如浄門下の人々で天童山に留まっていた禅者が存したのであれば、彼らは天童山で自鏡や大光にも参学した可能性が存しよう。たとえば、雪窓祖日という禅者は無際了派の法を嗣いだ高弟であったが、天童山の住持が如浄に代わっても引きつづき随侍し、如浄の天童山における上堂を侍者として編集し、日本僧道元とも深く関わっている。かつて天童山の如浄のもとで道元と知り合った一介の若き修行僧寂円（一一〇七—一二九九）は紹定元年（一二二八）に道元を頼って日本に向かつて旅立っているが、ときに天童山では自鏡の示寂を受けて大光が入寺した年であったと見られる。天童山の新命住持に大光が就任したことを寂円が果して道元にどのように告げたのかは興味深いものが存しよう。

註

(1) 天童山の無際了派については拙稿「天童山の無際了派とその門流—道元が入宋して最初に参学した臨濟禅者—」（『駒澤大学仏教学部論集』第三九号、平成二〇年（二〇〇八）一〇月三十一日）が存し、また内容を要約した拙稿「無際了派とその弟子たち—入宋した道元との関わりを踏まえて—」（『宗学研究』第五一号、平成二二年（二〇〇九）四月一日）も存するので、こゝを参照されたい。

(2) 平田万年寺の元轟について、道元は『正法眼蔵』の草案本「嗣書」の巻に、

又宝慶のころ、道元、台山・鴈山等に雲遊するついでに、平田の万年寺にいたる。住持者、福州の元轟和尚なり。宗鑑長老退院ののち、轟和尚補す、叢席を一興す。人事のついでに、むかしよりの仏祖の家風を往来せしむるに、大瀉・仰山の令嗣

話を君挙するに、長老いはく、曾看嗣書也否。道元いはく、いかでかこれをみん。長老すなはちみづからたちて、嗣書をささげていはく、這箇はたとひ親人なりといえども、たとひ侍僧のとしをへたるといえども、これをみせしめず、これすなはち仏祖の法訓なり。しかあれども、元龜ひごろ出城して見知府のために在城のとき、一夢を感じるにいはく、大梅山法常禪師とおぼしき高僧ありて、梅花一枝をさしあげていはく、もしすでに船舷をこゆる実人あらんには、花をおしむことなかれ。といひて、梅花をわれにあたふ。ときに元龜おぼえずして夢中に吟じていはく、未跨船舷、好与三十。しかあるに、不経五日、与老兄相見。いはんや老兄にすでに船舷跨来、この嗣書、また梅花綾にかけり。大梅のおしふるところならむ。夢草と符合するゆえにとりいだすなり。老兄もしわれに嗣法せんことをもとむや。たとひもとむともおしむべきにあらず。道元、信感おくところなし。嗣書を請すべしといえども、ただ焼香礼拝して恭敬供養するのみなり。ときに焼香侍者法寧といふあり、はじめて嗣書をみるといひき。これは落地梅綾のしろきにかけり。長九寸余、闊一尋余なり。軸子は黄玉なり、表紙は錦なり。と書き残している。また瑞長本『建搯記』には、道元が天童山の無際了派、径山の浙翁如琰、台州小翠巖の盤山思卓に参学したることにつづけて、

其次ニ惟一西堂、宗月長老、亦伝蔵主及ヒ万年寺の元鼎和尚等ニ相見シテ問レ道求レ法給ウニ、何モ未レ契レ心ニ。(中略)此七人ノ長老達ノ眼睛、吾ヨリモ劣レリト思イ給テ、去テハ日本・大唐ノ間ニ、吾レニ益レル大善知識ハ無ケリト、大橋慢ヲ起シ、帰朝セント思イ給也。

と記されており、ここでは万年寺の元龜についても低い評価しかなされていない。

(3) 『掌珠宗派図』折本一冊は宝永元年(一七〇四)林鍾一〇月に深江元彬(文水)が蔵春庵(東福寺の塔頭蔵春軒か)で編纂したものであり、駒澤大学図書館(駒大・折一五三)に所蔵されている。『伝燈歴世譜』三巻は、駒澤大学図書館(駒大一一四・一一二)に所蔵されている。

(4) 「拈華微笑」の古則とは、『大梵天王問仏決疑経』「拈華品」に「爾時如来坐三此宝座、受三此蓮華、無レ説無レ言、但拈三蓮華、入三大会中。八万四千人天時大衆、皆止默然。於レ時長老摩訶迦葉、見三仏拈三華示、衆仏事、即今廓然、破顔微笑。仏即告言、是也。我有三正法眼蔵涅槃妙心実相無相微妙法門、不立文字教外別伝、総持任持、凡夫成レ仏。第一義諦、今方付三属摩訶迦葉。」言已默然。爾時尊者摩訶迦葉、即從レ座起、頂三礼仏足。」(統蔵八七・三二六c)として載る因縁であり、『宗門聯燈会要』巻一「釈迦牟尼仏」の章にも「世尊在二靈山会上、拈レ花示レ衆。衆皆默然。唯迦葉破顔微笑。世尊云、吾有正法眼蔵涅槃妙心、実相無相微妙法門、

不立文字、教外別伝、付^二囑摩訶迦葉^一」（続蔵一三六・二二〇d～二二一a）として載せられており、一般には『無門関』第六則「世尊拈華」の公案として広く知られる。

(5) 虎丘派の笑庵了悟、大慧派の笑翁妙堪と笑隠大訢といった禪者のほかにも、『渭南文集』卷四〇「塔銘」の「高僧猷公塔銘」や、『補続高僧伝』卷三「子猷法師伝」によれば、華嚴宗の修仲子猷（笑雲老人、一一二二—一一八九）が越州（浙江省）山陰県の陳氏の出身であり、山陰県城東の妙相教院を中心に活動し、晩年には自ら笑雲老人と号したとされる。また華嚴宗の教僧である笑庵観復は、毘陵すなわち常州（江蘇省）武進県の華嚴教寺に住し、華嚴四大家の一人と称されて『円覚経鈔辨疑誤』二卷や『遺教経論記』三卷を著している。

(6) 楊岐派の無庵法全については、『嘉泰普燈録』卷一九「湖州道場無庵法全禪師」の章や『南宋元明禅林僧宝伝』卷三「道場全禪師」の章および『叢林盛事』卷上「全無菴」の項などが存している。法全は蘇州（江蘇省）東吳玉峰の陳氏の出身で、一六歳で仏門に投じ、雲門宗の治父道川（川金剛）のもとで得度し、二〇歳のとき受具している。福州（福建省）閩県の怡山長慶西禪寺に赴いて蓬庵端裕に参学し、久しく侍者として随侍して悟道し、端裕が明州鄞県の阿育王山に陞住するのにも随順して首座となった。その後、法全は撫州（江西省）宜黄県の臺山や撫州臨川県の白楊院などに住持しており、隆興元年（一一六三）に湖州の道場山護聖万寿寺に化導を敷いている。蘇州呉県の虎丘山雲巖禪寺で最期を迎え、乾道五年（一一六九）七月二五日に世寿五六歳で示寂している。法嗣には常州（江蘇省）無錫の華藏寺に住した伊庵有権（？—一一八〇）が存している。

(7) 大慧派の無等有才については、『増集統伝燈録』卷六末に付録される『五燈会元補遺』に「径山大慧杲禪師法嗣」として「杭州径山無等有才禪師」の章が存しており、いくぶん詳しい事跡が知られる。有才は杭州（浙江省）富陽県の楊氏の出身であり、幼くして出家して諸禪者に参学した後、衡陽（湖南省）の花葉寺山堂に蟄居していた楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲のもとに投じて印可を得ている。宗杲が梅陽（広東省）に配流される際にそのもとを離れ、真州（江蘇省）儀真県の北山崇因永慶禪寺（北山寺）に出世開堂し、同地の資福禪寺にも住持している。紹興三年（一一六二）に虎丘派の応庵曇華の後席を継いで蘇州（江蘇省）呉県の万寿報恩光孝禪寺に遷住し、乾道元年（一一六五）の秋に法兄の大禪了明が杭州餘杭県の径山能仁禪院（後の興聖万寿禪寺）の住持を退院した際、参政の銭雅の推挙で径山の後席を継いでいる。乾道二年（一一六六）の春には太上皇の高宗（趙構、字は德基、一一〇七—一一八七、在位は一一二七—一一六二）が径山に行幸し、有才に度牒や金帛を賜わり、乾道四年（一一六八）の夏には皇帝の孝宗（趙昀、字は元永、一一二七—一一九四、在位は一一六二—一一八九）に召されて宮中

の選徳殿で法を説いている。乾道五年（一一六九）六月二六日に有才は遺偈を書して世寿五四歳、法臘三九歳で示寂している。

(8) 密庵咸傑の法を嗣いだ門人について『増集統伝燈録』巻二では「天童密菴傑禪師法嗣」として「靈隠松源崇岳禪師」「臥龍破庵祖先禪師」「龜峰曹源道生禪師」「天童枯禪自鏡禪師」「淨慈潛庵慧洪禪師」「隱靜萬庵致柔禪師」「靈隠笑庵了悟禪師」「蔣山一翁慶如禪師」「承天鉄鞭允韶禪師」「約齋居士侍郎張公鉉」「業海茂禪師」「栢庭文禪師」という二人の名を挙げており、「仏祖正伝宗派図」では「天童密菴咸傑」の法嗣として「靈隠笑庵了悟」「靈隠松源崇岳」「昂上座」「円上座」「孜上座」「柔上座」「侍郎張鉉」「蔣山一翁慶如」「隱靜萬菴致柔」「薦福曹源道生」「臥龍破菴祖先」「天童枯禪自鏡」という二人の名を挙げていて、『正誤仏祖正伝宗派図』四では「天童密菴咸傑」の法嗣として「靈隠松源崇嶽」「蔣山一翁慶如」「柔上坐」「孜上坐」「栢庭文」「靈隠笑菴了悟」「龜峰曹源道生」「天童枯禪自鏡」「隱靜萬菴致柔」「業海茂」「淨慈潛菴慧光」「承天鉄鞭允韶」「円上坐」「昂上座」「約齋張公鉉居士」「臥龍破菴祖先」という一六人の名を挙げています。

(9) 絶岸可湘については『増集統伝燈録』巻四「福州雪峰絶岸可湘禪師」の章や『統燈存稟』巻四「福州雪峰絶岸可湘禪師」の章では伝記的な記事が見られないが、『継燈録』巻三「福州雪峰絶岸可湘禪師」の章に簡略な事跡が記されている。幸いに可湘には『絶岸和尚語録』一卷が伝えられているから、これと兼ね合わせることよって行実が少しく判明する。可湘は台州寧海県の葛氏の出身であり、径山の無準師範に参じて法を嗣いでいる。宝祐元年（一二五三）一〇月に請を受けて嘉興府（浙江省）嘉禾の流虹興聖禪寺に入院開堂して師範に嗣承香を焚いている。その後、温州樂清県の雁蕩山能仁禪寺、越州新昌県の九巖恵雲禪寺、天台山の護国広恩禪寺、杭州臨安府在城の崇恩演福禪寺、温州永嘉県の江山龍翔興慶禪寺を経て、咸淳八年（一二七二）に福州侯官県の雪峰山崇聖禪寺に住持し、およそ一〇年を経て院事を謝して杭州の宝寿寺に退居している。至元二七年（一二九〇）に世寿八五歳で示寂し、靈骨を奉じて雪峰山の西庵に塔が建てられたとされる。可湘の法嗣には福州東禪寺に住持した雲叟以従と泉州開元寺に住持した断崖妙恩が知られる。

(10) 絶岸可湘の「密庵、笑庵」に授くる法語、齊侍者求むの跋文を書き下すならば、

世尊に密語有り、迦葉は覆藏せず。的的として相承し、蠱毒より甚だし。其の家に到らん者、水は飲むべきか。然して密庵にして笑庵有ること、猶お世尊にして迦葉有るがごとし。笑顔一たび破びて、密語は乖張し、直下の子孫、計の遮掩する無し。思齊侍者、予に対して訐を告ぐ。故に欺に抛りて結びに云う。

といった具合になろう。可湘は密庵咸傑を「世尊密語」の釈迦牟尼仏に進え、笑庵了悟を「破顔微笑」の摩訶迦葉に譬えている。

(11) 『密菴和尚語録』巻下の巻末に所収される刑部尚書の葛邲（字は楚輔）が撰した「塔銘」に、

其分坐而説法、則見_二於眞門之万寿・四明之天童。其正坐而説法、則見_二於三衢之烏巨之祥符・金陵之蔣山・無錫之華藏、所_レ至之處、拳_二揚宗旨。淳熙年、有_レ旨住_二徑山。（中略）七年、自_二徑山_一遷_二靈隱。（中略）十一年、帰_二老于天童。十三年六月、忽示_二微疾。十二日、趺坐而逝。

とあり、密庵咸傑は七ヶ寺に住持している。『密菴和尚語録』巻上「密菴和尚住衢州西烏巨山乾明禪院語録」によれば、咸傑は乾道三年（一一六七）八月二日に衢州の西烏巨山乾明禪院に開堂出世している。つづいて同じく巻上「衢州大中祥符禪寺語録」が存しており、咸傑は同じ衢州の祥符寺に遷住しているが、その時期については定かでない。『枯崖和尚漫録』巻下「東山源禪師」の項に「上衢州祥符、見_二殺六巖_一」とあり、大慧派の東山道源（一一八三—一二四一）が衢州の祥符寺に上山して楊岐派の六巖口殺に參学していることから、十三世紀前半に六巖口殺も祥符寺に住持していることが知られる。

(12) 了悟が孔子のことばとして引用する「生而知_レ之者上也、学而知_レ之者次也」という語句は、『論語』「季氏第十六」に「孔子曰、生而知_レ之者上也。学而知_レ之者次也。困而学_レ之、又其次也。困而不_レ学、民斯為_レ下矣」とあるのに基づく。また老子のことばとして引く「恍恍惚惚、其中有_レ物、杳杳冥冥、其中有_レ精」という語句は、『老子』「虚心第二十一」に「孔徳之容、唯道是從。道之為_レ物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有_レ物」とあるのに基づく。一方、釈迦牟尼仏のことばとして引く「未_レ離_二兜率_一、已降_二王宮_一、未_レ出_二母胎_一、度_レ人已畢」の語句は、禪宗の語録で多く使われるものであり、『円悟仏果禪師語録』巻一「小参四」（大正蔵四七・七六一b）などに引用される。

(13) 「睦州一重」の古則に対する了悟の頌古は、『禪宗頌古聯珠通集』巻二二「睦州陳尊宿」の章にも「咲菴悟」の作（続蔵一一五・一三五c）として載せられている。しかしながら、「徳山棒」の古則に対する了悟の頌古は、同巻二三「徳山棒」の頌古（続蔵一一五・一四四b~d）の中には収められていない。

(14) 『船子和尚撥棹歌』巻下「諸祖讚頌」の「咲菴悟禪師」の作を書き下すならば、
 菓山の毒菓、喉嚨に灌ぎ、菓発して端無くも道吾を累わす。耳を掩いて直饒い親しく薦得するも、鉄船は翻覆して錯つて名模す。

となり、船子徳誠が菓山惟儼から伝えられた仏法を悪辣な手段で夾山善会に付与したありようを了悟は独特の表現で偈頌に詠い上げている。ただし、『禪宗頌古聯珠通集』巻一七「秀州華亭船子徳誠禪師」の章（続蔵一一五・一〇四b~一〇五d）には、

この了悟の頌古は収められていない。

- (15) 晦巖大光については、すでに吉田道興「天童寺世代考(四)」(愛知学院大学『禅研究所紀要』第一八・一九合併号)に「晦巖大光(仏光) 〓東谷妙光」として、また石井修道『道元禅の成立史的研究』(大蔵出版刊)の「道元の宋代禅批判」に「育王大光について」として、それぞれ考察が存している。本稿もそれらの成果に基づいてさらに独自の検討を加えたものである。

- (16) 松源派の晦巖〓暉に関しては、『枯崖和尚漫録』卷下「西蜀保福晦巖暉禪師」の項に、
西蜀保福晦巖暉禪師、通泉白氏子。嘗与肇諾庵・道谷源・開掩室、同参松源、密契真要。帰里三主道場、遠近敬郷、道化益盛。散夏小参云、(中略)語悉類此。癡絶在蒋山、題其録云、大随和尚道、我参七十餘員善知識、具大眼目者只得一二。其他皆具正知見。予三十年前在叢林中、与晦崑游。当時具大眼目者、惟老松源一人而已。歳次庚寅仲秋、其徒宝日、携下主東林提唱之語、乞予編次。由是開帙、縦観一字一句、造次顛沖、皆有従上大眼目、体裁非徒従事於語言之末。是知、松源之道尽在是矣。烏虜、去古既遠、師法益壞。正知見者艱其人、大眼目者可知矣。晦崑雖三話行於吾蜀、此録流播江湖。是可下為斯道之敌盟。若善觀者始信吾言之不妄。癡絶亦有所激而云。(続蔵一四八・八七d、八八a)

と記されており、比較的詳しい事跡が知られる。晦巖暉は通泉(四川省)の白氏の出身であり、同じ蜀僧であった諾庵師肇・谷源至道・掩室善開らとともに松源崇嶽のもとに参学したこと、廬山の東林寺に住持した後に郷里西蜀の保福寺などで活動したこと、門人の宝日が紹定三年(一二三〇)仲秋に建康府(南京)の蒋山太平興国禅寺の住持であった癡絶道冲に廬山東林寺における語録の校訂編次を依頼し、道冲は一字一句を点検した上で跋文を寄せていることなどが知られる。晦巖暉の語録はおそらく『晦巖暉和尚語録』といった表題であったものと推測される。

- (17) 大慧派の北磻居簡(敬叟、一一六四—一二四六)の『北磻詩集』卷六「銘」には、二首の「晦巖銘」が収録されている。

晦巖銘(勇知客)。
振耀而九鳥斃、潜伏而九淵照。息陰以居、洞窺煥若。日中疾帰、儻恍杳邈、是故君子用晦而守レ約。

晦巖銘。

為平衡台之学者、曰慧明、強記覽知名於衆、号晦巖、為之銘。銘曰、智燭也燭諸理、退隱無或遺、善用智者、罔不若レ是、智其智、弗時其用、過則罔不レ殆、離婁子。所以弗若罔象之為レ愈也。

笑庵了悟と晦巖大光(佐藤)

最初の「晦巖銘」は「曷知客」とあるから、門下で知客を勤めていた晦巖口曷という禅者に与えたものであるが、この人については如何なる禅者か全く知られない。いま一つは「衡台之学者」とあるから、衡山（南嶽）と天台山の学者すなわち天台宗の教僧に与えたものであり、具体的には晦巖慧明という人に付与した道号銘と推測される。

(18) 『松源和尚語録』巻下に崇嶽の晩年の上堂語録として「開山顕親報慈禅寺語録」を収めているが、ここにいう顕親報慈禅寺が具体的にいずれの州ないし県に建立されたのが明確でない。ただし、『咸淳臨安志』巻八〇「寺觀六」の「自『飛來峯』至『上竺』」の箇所に、顕親多福院や顕親慈光院などが存するから、これらのいずれかが顕親報慈禅寺であったものかも知れない。

(19) 天童山景德寺の住持であった曹洞宗の宏智正覚の推挙で大慧宗杲が阿育王山広利寺に住持した経緯については、拙稿「宏智晩年の行実について——天童宏智老人像の大慧賛をめぐって——」（『曹洞宗研究員研究紀要』第一六号、昭和五九年一二月）を参照されたい。また阿育王山広利寺と中世初期の日本仏教との関わりについては、拙稿「阿育王山広利寺と中世初期の日本仏教」（曹洞宗総合研究センター『學術大会紀要』第一四回、平成二五年六月）を参照されたい。

(20) 孤雲道権については『増集続伝燈録』巻一「四明育王孤雲権禅師」の章や『五燈会元統略』巻二上（巻三）の「慶元府育王孤雲権禅師」の章が存しているが、わずかに拙庵徳光の法を嗣いで阿育王山に住持したこと、阿育王山でなした一上堂を載せるのみで、伝記的な記述は全く存していない。『西禅長慶寺志』巻二「禅宗志」には、

第二十二代、孤雲権禅師。仏照光禅師之子。嘉定二年、闡法本山。

という記事が存する。道権はおそらく本貫は陝西であったとしても、実際には福州（福建省）近辺に生を受けた閩僧であったものと見られる。拙庵徳光の法を得て後、道権は嘉定二年（一二〇九）に福州府城西南永欽里の怡山西禅長慶禅寺に住持したことが伝えられるから、その後には明州阿育王山の住持に遷住したものである。『扶桑五山記』一「浄慈住持位次」には「廿八、孤雲権禅師」とあるから、道権は杭州浄慈寺にも住持している。『枯崖和尚漫録』巻上「宝峰端庵主」の項に、

宝峰端庵主、久侍三仏照。（中略）端恂恂如一鄙人、居一小庵、無一宿衾、戸外之屨常滿。同門如三権孤雲、印鉄牛、致一書招、之不_レ出。という記事が存している。宝峰口端は大慧派の拙庵徳光の法を嗣いで後、小庵の庵主として生涯を送り、同門の孤雲道権や鉄牛心印が書簡をもって招いても赴かなかったという内容である。おそらくこのとき道権はすでに杭州浄慈寺に住持しており、杭州靈隠寺の心印とともに同門の宝峰端を大刹の住持に拝請したものの、宝峰端がその招きに応じなかったであろう。

(21) 如庵惠崇については『増集続伝燈録』巻一「径山別峰印禅師法嗣」においても名すら見られず、『渭南文集』巻四〇「塔銘」

の「別峰禪師塔銘」にも記述が存していない。また円爾将来の「宗派図」には辛うじて名が存するものの、それより以降の南北朝期の『仏祖正伝宗派図』や室町期の『仏祖宗派図』および江戸期の『正誤仏祖正伝宗派図』などには、別峰宝印の法嗣に如庵惠崇の名は一切記されていない。

(22) 『明州阿育王山志』卷三「塔廟規製」の「育王上塔碑記」の全文を載せるならば、つぎのような内容となっている。

四明古鄞峰、釈迦舍利涌現之地、自晋太康、建東西二塔。東塔処勢左、特孤峻海上、森衛陰翊、態度無不可悦。興造以来、中間興廢、不可稽攷。慶歴六年、住山常坦禪師、更其旧制、始刻記銘。政和年間、真戒大師曇振、紹興十二年、無示禪師介謙、淳熙七年、仏照光禪師、皆嗣而葺之。独於椽柱、時雨陰漬、日久寝壞、率未能易。命高僧拈微為記書、題壁間。以告後人之繼其志者。嘉定二年春、温陵沙門大明、一再登臨環視塔院、方患其局、促不足以表。先仏遺跡、忽覩壁間文、嘆曰、□□□□□□此記、似為我設、當与振起之。是年夏五月、塔崩二角。明年八月、大風擊屋木一拔者万計、塔頂鈴索擺掣俱斷。又明年八月二日、風雨益号、塔益狼狽、堂宇殿軒周廻、悉以頽枕籍、無有遺餘。遂募衆緣、革去心柱、更鑄相輪、重飾珠層、級數敗、悉從整治、開拓基趾、增築垣牆、為屋凡一百五十楹、皆更造焉。塔殿前後、塑為二十八心真・補陀大士・宝相門檻莊嚴之具、靡不畢備。崇奉之礼、於是為稱費。緡錢一万。落成之日、山中耆旧雲納、遊觀瞻仰贊歎。不復有前人之遺恨矣。明住山如庵惠崇書來求記。余曰、釈迦不出世、亦無有方所、育王無所造、耶舍亦非藏。無一法可取、無一法可捨。以何為是塔耶、塔既不可得。又曷有隱者、四聖六凡、森羅万象、帝網交光、重重海印、無縫宝塔。是処發揮、又何為非塔耶。既皆奉是曷有新故耶。當知是塔非有非無、非隱非顯、非是非非、非新非故、又何假土木瓦石金碧丹青耶。後為是塔耶。明日、雖然譬如琴瑟箏篴、雖有妙音、若無妙指、終不能發。我以無作之作、成此無功之功。其以無說之說、為我記之、不亦可乎。遂摘其言、為記始末。

嘉定七年八月望、秘書省校書郎凌雲薛叶撰。

嘉定二年(一一〇九)夏五月に阿育王山の上塔が崩れ、さらに嘉定三年(一一一〇)八月と嘉定四年(一一一一)八月にも暴風雨で堂宇が破損したことが知られる。その当時の住持は道権より以前、曹洞宗宏智派の海印徳雲か大慧派の晦庵悟明(晦翁)が住持であった時期と推測されるが、その後、道権が住持を勤め、さらに惠崇に交代したのではないかと見られる。やがて上塔が落成し、十八羅漢などの塑像も具わり、住持の惠崇の求めに応じて、嘉定七年(一一一四)八月望日に秘書省校書郎であった薛叶(凌雲)が「育王上塔碑記」を撰しているわけである。惠崇が阿育王山の住持を勤めていたのが何時までであったのか

は定かでないが、その後もしばらくは住持していたものである。

(23) 惠崇が示寂した年時は定かでないが、『禪林諸祖弔靈語彙』巻七「拳哀」に、

為「菴和尚」 高原泉。

大海乾枯、虚空粉碎。如菴老人、東倒西播。狸奴白牯皆驚、三世諸仏不_レ會。若又於_レ斯見得、大家拍手呵_レ呵笑。其或未_レ然、

槌_レ胸依_レ旧哭_二蒼天_一。

という拳哀の法語が載せられている。拳哀とは葬儀が終了した後、衆僧一同が「哀」の語を三たび発声して亡くなった禪者を悼むことであり、楊岐派の高原祖泉が惠崇のために拳哀の拈香法語をなしたのである。ちなみに高原祖泉といえは、『如浄和尚語録』が編纂される際、如浄門下から依頼されて語録の校勘をなし、紹定元年（一二二八）一〇月一日（開爐日）に杭州靈隱寺の住持として跋文を寄せた禪者として知られる。

(24) 重源・栄西と阿育王山の普門從廓との関わりについては、拙稿「阿育王山の妙智禪師從廓について―平安末期の日本仏教界との関わりを踏まえて―」（『駒澤大学禅研究所年報』第二三号、平成二三年一月）と「明庵栄西の在宋中の動静について（上）―第一次入宋と重源および阿育王山広利寺をめぐる―」（『駒澤大学仏教学部論集』第四三号、平成二四年一〇月）を参照されたい。また阿育王山と中世初期の日本仏教との関わりについては、拙稿「阿育王山広利寺と中世初期の日本仏教」（曹洞宗総合研究センター『學術大会紀要』第一四回、平成二五年六月）を参照されたい。

(25) 鏡島元隆『天童如浄禪師の研究』（春秋社刊）の「如浄禪師の思想の研究」に載る「宋朝禪批判者としての如浄」の箇所には、さらに道元禪師が、育王大光の説である「仏祖の道と教家の談は水火なり、天地懸隔す。もし教家の所談に同ぜば、永く祖師の家風にあらず」という主張について、其の是非を質問したのに対し、如浄は、

慈誨して云く、唯だ大光一人のみに妄談あるにあらず。諸方長老皆またかくのごとし。諸方長老、豈に教家の是非を明らかにせんや。なんぞ祖師の堂奥を知らんや。只これ胡乱作來の長老のみ。

と答えている。如浄は祖師禪と教家の所説を区別する宋朝禪者を、教家の所説についても知らず、祖師禪についても知らない「胡乱作來の長老」である、と極めつけているのである。

とあり、如浄が教外別伝思想でもなく、教禪一致の立場でもなく、仏法の總府の立場から捉えていたことを強調している。

(26) 伊藤秀憲『道元禅研究』（大蔵出版刊）では「道元の著作について」の『宝慶記』の記録期間」と『宝慶記』の問と答」の「教

外別伝と一仏法」の両所に、この問答が取り上げられている。

(27) 枯禪自鏡については、『枯崖和尚漫録』卷下「東山源禪師」の項に、

東山源禪師曰、往年出嶺、初上徑山。其時枯禪做首座、立僧、破庵西堂掛牌。一時龍象畢集、如石田・無準・皆同在衆寮。
(続藏一四八・八七b)

とあるから、大慧派の東山道源(一一八三—一二四二)が若くして徑山に到った当時、自鏡が立僧首座を勤め、破庵祖先が西堂を勤めており、このとき石田法薫や無準師範らが一介の修行僧として衆寮に居していたことが知られる。また『枯崖和尚漫録』卷中の「枯禪鏡禪師」の項に、

枯禪鏡禪師、清苦古朴。太師史衛王、尤致敬之。初接見即問曰、疎山曹家女始末如何。枯禪厲声曰、相公与麼問、失却一隻眼。然則祖師垂示、可得而箋注耶。左右愕然、王笑而已。遂進席徵詰、論辯至夜分方散。惜當時無人与記録耳。枯禪每見下求掛搭者、則先令撤去白領、剪除濶袖、方許相看。(続藏一四八・八二b)

とあり、自鏡が清貧で朴訥な性格であったことを伝え、史衛王すなわち宰相の史彌遠と交友が深かった点などが記されている。同じく『枯崖和尚漫録』卷下の「枯禪鏡禪師」の項にも、

枯禪鏡禪師、天資淡薄、一無嗜好。惟与衲子提撕敲磕不倦。有問、如何是祖師西来意。枯禪拍禪床一下。今人吐露語言、千百皆不能得、到前輩地位。且利害在什麼處、会麼。(続藏一四八・九一a)

と伝えられており、ここでも自鏡は物事に拘らない淡泊な性格であったことが伝えられているから、如浄とも意気投合する孤高な気風を具えた禪者であったものと見られる。

(28) 椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』(大東出版社刊)の付録二「宋金元版禅籍逸書目録」によれば、

〔枯禪自鏡禪師語録〕 ②宋、枯禪自鏡(嗣密菴咸傑) ④西禅長慶寺志二

とあり、椎名氏はすでに枯禪自鏡に語録が存したことに注目している。

(29) 明末曹洞宗の永覚元賢(一五七八—一六五七)が編集した『鼓山志』卷三「開士志」の「第四十一代枯禪禪師」の項では、

第四十一代枯禪禪師、諱自鏡。長溪人、姓高氏。受業泉州某寺。後徧參諸方、得法于密菴傑公。出世寧徳鳳山。嘉定癸未、移鼓山。鑄洪鐘、有掛鐘偈曰、一摸脱就転風流、平地教他不肯休、要得洪音喧宇宙、直須更上一層楼。紹定己丑、移真州北山、後移天童。甫至而寂、建塔天童。

となっており、紹定二年（一二二九）に真州（江蘇省）儀徵県の北山崇因永慶禅寺に住持し、その後天童山に遷住したかのごとく伝えている。これは全くの誤りであって、自鏡が住持したのは真州の北山寺ではなく杭州の北山景德靈隠寺であり、しかも入寺したのは紹定二年より遙か以前の宝慶元年のことである。当然、自鏡が天童山に住持したのも如浄が示寂した直後でなければならぬ。おそらく実際に自鏡が杭州の靈隠寺から明州の天童山に陞住したのは宝慶三年の秋か冬の頃であったと見てよいであろう。ちなみに『禪門諸祖師偈頌』卷四（卷下之下）には自鏡が鼓山を退住する際に詠じた「枯禅辞住鼓山」（鏡禅師）と題する二首の偈頌を載せている。

(30) 永覚元賢編『鼓山志』卷三「開士志」の「第五十一代仏慧愚谷禅師」の項にも、

諱元智。長溪人。姓薛氏。年十八出家、依邑之湛然本禅師。二十受具、往参枯禅鏡公于鳳山。後参少林崧于北山掌記。及少林移径山、鏡公嗣其席。師仍掌記、俄而契機、万境如如。

と記されており、これは「竹溪麴齋十一藁統集」卷二「鼓山愚谷仏慧禅師塔銘」の記事を受けている。

(31) 『扶桑五山記』の「天童住持位次」の記載がかなり正しく天童山の世代と歴任名を伝えている例として「四十、別山智禅師」とあり、破庵派無準下の別山祖智（智天王、一二〇〇—一二六〇）を第四〇世と伝えているが、『石刻史料新編』第三輯第八卷に所収される『鄞県志』卷五九「金石上」に「天童寺別山智禅師塔銘、在天童中峯庵」として「慶元府太古名山天童景德禅寺第四十代別山智禅師塔銘」が収められており、実際に祖智が天童山第四〇世であったことが確認される。

(32) 『枯崖和尚漫録』卷下「東山源禅師」の項に、

自此過平江靈巖、見癡鈍。時茂業海做前堂首座。今大慈笑翁、育王大夢皆在彼中同住。叢席甚盛。癡鈍常云、詢仏燈四十九日夜抱露柱、悟去。次上蒋山、見洵翁。（続藏一四八・八七c）

という記事が存している。これは大慧派の東山道源の参学期の消息を伝える内容であって、道源が蘇州の靈巖寺で癡鈍智穎に参学した当時、業海□茂が前堂首座を勤め、笑翁妙堪と大夢徳因が会下で同参であったことを伝えている。やがて道源は建康府（南京）の蒋山太平興国寺に上山して浙翁如琰に相見し、如琰の法を嗣ぐことになる。興味深いのは「今の太慈の笑翁、育王の大夢、皆な彼の中に在りて同じく住す」と記されており、徳因が阿育王山に住持していたのは妙堪が明州鄞県の大慈山教忠報国禅寺に住持していた時期と重なっていることである。『物初贖語』卷二四「行状」の「笑翁禅師行状」によれば、

大丞相史衛王、造寺嚴親、規制埒天育。紹定己丑、命師開山。泊抵行都、有詔主靈隠。師擬表遜、王勉之曰、靈隠国刹、

大慈家利耳、蓋先_レ国而後_レ家乎、奚遜為。居_二之三年、去_二積固之弊、興_二悠久之利。靈隱為改_レ觀、始踐_二大慈開山之約。(中略)師方治_二閩中之行、道接_二台守直齋陳侍郎振孫書、命主_二瑞巖。而衲子要_レ遮_二于途者、至_二百餘人。師不_レ得而辭。端平丙申、領_レ寺職。月復行。(中略)育王久虛_レ席、朝論_二念迦文真身所在、思能振起者、精拏得_レ師。表辭一再不_レ許。淳祐癸卯領_レ寺、夙弊画洗、氣象一新、法堂最圯、会其費夥。

とあるから、妙堪が明州大慈寺の開山始祖として住持していたのは紹定年間(一二二八—一二三三)の後半から端平年間(一二三四—一二三六)以前のことであり、その後、淳祐三年(一二四三)に至って妙堪は久しく虚席になっていた阿育王山に入寺している。妙湛が正式に入寺する以前、延慶寺の法照が天童山の道冲を推挙して阿育王山を兼務せしめたものであろう。

(33) 宏智派の東谷妙光については、拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝(下)」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五〇号、平成四年三月) 宏智派の東谷妙光については、拙稿「南宋末曹洞禅僧列伝(下)」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五〇号、平成四年三月)の「東谷妙光」の項を参照されたい。

(34) 少林妙崧については『枯崖和尚漫録』卷上「臨安府徑山少林仏行崧禅師」の項に、

臨安府徑山少林仏行崧禅師、生_二於建之浦城徐氏。受_二業於夢筆峰等覺、瑞_二世於安吉報本、嗣_二東庵。道声四馳。未_レ幾、起住_二杭之淨慈。上堂(中略)既退_レ席、過_二武康宴山接待寺。寧廟尤重_二仏法。嘉定間、再得_レ旨董_二南山。即詔延和殿登封、賜_二

号仏行禅師、金欄袈裟籠栄至矣。(続蔵一四八・七四a)とあり、同じく『枯崖和尚漫録』卷中「参預真文忠公德秀」の項にも、

参預真文忠公德秀、与_二双徑崧少林、同_二里閨。相与講_レ道、翰帖往来無_二歳無_レ之。(続蔵一四八・八〇d)

と記されている。妙崧は建州(福建省)浦城の徐氏の出身で大慧派の拙庵徳光(東庵)の法を嗣いだ高弟であり、曹洞宗の長翁如浄と相前後するかたちで杭州浄慈寺に初住・再住をなしたことが知られ、その間に仏行禅師の勅号を賜わっている。やがて妙崧は同門の浙翁如琰の後席を継いで徑山に陞住しており、参与の真徳秀(字は希元、文忠公、西山先生、一一七八—一二三五)と交友が深かったことが伝えられている。また『仏鑑禅師語録』卷五「序跋」には「跋_二少林語録」が収められており、妙崧には『少林崧和尚語録』(あるいは『仏行禅師語録』か)といった表題の大部の語録が編纂されたことが知られ、徑山の後席を継いだ無準師範が妙崧の語録に跋文を寄せている。椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』(大東出版社刊)の「宋金元版禅籍逸書目録」によれば、『建州弘积録』卷上「元松溪仏行少林崧禅師」の項や『徑山志』卷二「列祖」の「第三十三代仏行少林

崧禪師」の項に基づいて、妙崧に語録一〇巻が存したことを記している。『少林崧和尚語録』には、おそらく妙崧が生前に関わった如琰・如淨・師範らとの道交を伝える記事なども数多く載せられていたことであろう。

(35) 『明州阿育王山統志』巻六「先覚攷(補遺)」には「第三十三代、無準範禪師。嗣臥龍先公。三月十八日忌」とあり、師範の後席を継いだ禪者として「第三十四代、石堂明禪師。二月初七日忌」と記されている。ただし、『扶桑五山記』一「育王住持位次」によれば、「卅二、無準範禪師」につづいて「卅三、大夢因禪師」となっており、石堂□明が世代になく、ただちに楊岐派の大夢徳因が後席を継いだことになっている。石堂明については『増集統伝燈録』巻一「目錄」や『仏祖正伝宗派図』に大慧派の迦庵宗演の法嗣として載る「育王法明」のことを指しているものと見られ、石堂法明(晦堂とも)と表記しておきたい。

(36) この点については、伊藤秀憲『仏鑑禪師語録』の上堂年時考―宝慶三年如淨示寂説を確かめる―(駒沢大学中国仏教史蹟参観団編『中国佛蹟見聞記』第七集、昭和六一年八月)によれば、無準師範が径山に入院住持したのを紹定五年(一二三二)七月一五日の「解制上堂」と九月九日の「重陽上堂」の間であったと解している。これより先、径山にて大慧派の少林妙崧が示寂し、紹定五年四月の後半には阿育王山の師範のもとに遺書が届けられ、師範は「径山少林和尚遺書至上堂」を行なっている。おそらく師範は前住妙崧の依託を受け、朝廷からの黄勅で径山に陞住したものであろう。

(37) 径山の回禄については、無準師範の伝記史料にそれぞれつぎのように記されている。京都東福寺に所蔵される徳如が撰した「行状」では「及主_レ席之二年夏四月、寺忽罹_レ火。師詞色不_レ変則曰、此寺当_レ再_レ新於我_レ也。繼而上方錫賚甚寵、士夫檀越皆忻然樂_レ施」と記されている。『無文印』巻四「行状」に載る大慧派の無文道璨(柳塘、一一二四―一一七一)が撰した「径山無準禪師行状」では「明年寺燬。先是師夢、有_レ烈丈夫、授以_レ明珠二十一顆。莫_レ知_レ謂_レ何。及_レ寺焚、則四月二十一日也。師逆知_レ其數、不_レ動容変色、安_レ衆行道、如_レ無_レ事時」と記されている。また『後村先生大全集』巻一六二「墓誌銘」に載る劉克莊(字は潜夫、号は後村、一一八七―一二六九)が撰した「径山仏鑑禪師」の墓誌銘でも簡略に「次年四月、寺燬于火」と記されている。これらの記載によれば、師範が入院した翌年に当たる紹定六年四月二日に径山は火災に見舞われていることが知られる。この点は『仏鑑禪師語録』巻一「径山興聖万寿禪寺語録」においても、四月八日の「浴仏上堂」と五月五日の「端午上堂」の間に「火後上堂」が収められており、伝記類と合致している。

(38) 『補統高僧伝』巻一一「虚舟度伝」においては、

若_二天童晦巖光・大慈石巖璉・虎丘石室迪、皆一見器異、留与_二法務。淳祐初、制府趙信菴、以_二金陵半山_三請_二出世。

とあり、「行状」の記載をそのまま受けて正しく天童の晦巖光となっており、また虎丘の石室迪は石室迪と記されている。

(39) 『増集続伝燈録』卷三「四明育王寂窓有照禪師」の章によれば、寂窓有照が福州(福建省)侯官東西一五里の怡山西禪長慶禪寺で枯禪自鏡に参じた後の記事として、靈隱寺に遷住した自鏡のもとで侍者を勤めてから、

禪遷_二靈隱、師掌_二内記。已而見_二大梅石巖・虎丘菴藜・鄞峰無準・金山大歇、皆深器重。以_二母老_一歸省、雪峰癡絶留掌_二記室_一と記されているから、虚舟普度が天童山の光大や明州鄞県の大慈山教忠報国禪寺の石巖希璉に参学するより若干ながら以前には、石巖希璉は大慈寺の住持ではなく、いまだ同じ鄞県の大梅山護聖禪寺に住持していたのであり、蘇州呉県の虎丘山では石室迪より以前には松源下の葵藜正曇が住持であったことが知られる。また有照は明州の阿育王山において無準師範に参学しており、鎮江(江蘇省)の金山龍游禪寺に赴いて松源下の大歇仲謙にも参見している。その後、有照は福州侯官県の雪峰山崇聖禪寺にて曹源派の癡絶道冲のもとに投じて記室(書記)を掌っている。ちなみに道冲が天童山に陞住するのは嘉熙三年(一二三九)一〇月に至ったことである。

(40) 石巖希璉については『仏法金湯編』卷一五「南宋」の「葉適」の項に、つぎのような記事が存している。

適号_二水心先生、有_二水心集、行_二於世_一。適与_二石岩璉禪師_一帖云、(後略)

この記載によれば、希璉は葉適(字は正則、水心先生、一一五〇—一二三三)と交遊が存したことが知られるが、実際に葉適の『水心集』には「適与_二石岩璉禪師_一帖」が収められていない。日本僧道元は諸山歴遊を終えて天台山から天童山に帰る途中で明州鄞県の大梅山護聖禪寺を訪れているが、『増集続伝燈録』卷三「四明育王寂窓有照禪師」の章を踏まえると、时期的にこのとき大梅山護聖寺の住持を勤めていたのは松源下の希璉であったと見られる。諸山歴遊中に道元に対して浄慈寺の如浄に参学することを勧めた老璉とは、あるいは大梅山の希璉ではなかったかとも推測される。『仏鑑禪師語録』卷一「住雪竇山資聖禪師語録」には「石巖和尚至上堂」が存しており、同じく『仏鑑禪師語録』卷五「序跋」にも「跋_二石巖語録_一」が収められているから、希璉には『石巖和尚語録』といった表題の語録が編集され、無準師範が跋文を寄せていることが知られる。

(41) 『江湖風月集』卷上の「西蜀晦谷光和尚」の詠じた三首の偈頌を書き下すならば、つぎのごとくなるう。

鐘樓の匠人に贈る。

大匠、曾て棄つべき材無し、胸中に自ら一楼臺有り。是れ誰か敲動す、黄昏の月。覚えず声に和して送り出だし来たる。

政黄牛。

笑庵了悟と晦巖大光(佐藤)

只だ牛の瘦せて角の瘦せざるを知り、心高く句も亦た高きを覚えず。行きて六橋の煙雨の外に到れば、緑蒲は鬢鬢として尽く風騒なり。

捷書を読む。

關外の安危、策は已に成る。鋒を全うし戦わずして人の兵を屈す。帰り来たれば両眼は寰宇を空じ、一曲の琵琶、月明に奏す。第一首は寺内の鐘樓堂を造る職人に贈った偈頌であり、第二首は杭州臨安縣南二里の浄土禪寺で黄牛に騎つて風狂をなした法眼宗の浄土惟政（政黄牛）の自由闊達な生き方を詠じたものである。すでに述べたごとく大光の本師である笑庵了悟にも「讚政黄牛」という仏祖贊が伝えられている。第三首は塞外で蒙古（元）の軍と戦う南宋軍の戦勝の知らせを聞き知って詠じたものである。これら三首の偈頌が真に大光の作であれば、大光に関する貴重なことばということになる。

(42) 柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第一一巻に収める『江湖風月集』の註釈書には、晦谷光についてつぎのように伝えている。『江湖集考証』第二冊では「西蜀晦谷光和尚」に「増統并宗派図、俱不載」と記して何も嗣承について触れていない。また『江湖風月集略註』と『首書江湖風月集』第二冊では「西蜀晦谷光和尚」に「光字又作彰。宗派図、仗錫晦谷彰、嗣無準」とあり、さらに『江湖集夾山抄』第四冊では「西蜀晦谷光和尚」に「光字、異本作彰。仗錫晦谷彰、嗣無準」と註し、いま一つ『江湖風月集訓解添足』第四冊では「西蜀晦谷光和尚」に「光一作彰。宗派図、仗錫晦谷彰、嗣無準。増統伝燈四、無準法嗣廿人、不載晦谷」と註している。ここでは「光」を強引に「彰」のこととし、概ね無準師範の法を嗣いで明州鄞県の仗錫山に住持した晦谷彰が晦谷光であると解している。

(43) 『墨蹟之写』に載る天童山の大光が詠じた「布袋和尚図」の画贊を書き下してみれば、およそつぎのごとくなる。

下生の弥勒仏、徒らに布袋に寄りて遊ぶ。口を開き天を仰いで咲い、活機は杖頭に在り。

天童比丘大光、贊す。

布袋和尚契此は弥勒菩薩の化身とされ、明州奉化県の大中岳林禅寺は俗に布袋道場と称されている。贊では弥勒仏が下生して布袋の身を借りて自由闊達に化導し、錫杖を撞いて天を仰いで口を開いて大笑いするさまが称えられている。大光が明州鄞県の天童山の住持として「布袋和尚図」に仏祖贊を寄せた画贊軸が何者かによって日本国内に将来されていたことは興味深い事実であり、もし仮に現在もこの一軸が日本国内の何処かに秘蔵されているのであれば、是非とも見てみたい代物である。

(44) 『禅林墨蹟拾遺』の九の癡絶道冲の墨蹟を書き下してみれば、

皮膚を脱脱して実存せず、之れを視れども見る無く聴けども聞く無し。從教い永劫に沈淪し去るも、如来の解脱門に入らず。道冲、晦巖の語の後に筆す。「玉山」「癡絶」「沙門道冲」

といった具合になる。内容からすると、青原下の薬山惟儼の「皮膚脱落」の語に基づく墨蹟と見られ、おそらく道冲の墨蹟は晦巖のそれにつづいて二幅対か一軸で表装されてまとめられていたものであろう。晦巖が大光を指すのか法照を指すのかは別として、晦巖の墨蹟も道冲の語に類した内容であったものと見られる。

(45) 田山方南氏は『禅林墨蹟拾遺解説』の湯木家藏「九、癡絶道冲墨蹟」の解題において、つぎのように説明している。

晦巖とは南宋理宗帝の扁依篤かつた仏光法師の号である。(中略) この伝は仏祖統紀通塞志に出ている。理宗の紹定二年に詔を賜はっているから癡絶とは同時代でも、少し先輩であらう。

(46) 癡絶道冲がいう「脱尽皮膚」の語句は、明らかに『宗門聯燈会要』巻一九「澧州薬山惟儼禅師」の章に、

馬大師一日問師、子近日見処如何。師云、皮膚脱落尽、唯有「真実」在。馬云、子之所「得」、可「謂」、協「於」心体、布「於」四肢。既然如「是」、宜「下」将「三条篋」、束「取」肚皮、随「処」住山去。師云、某甲又是何人、敢言「住山」。師云、不「然」、未「有」「長行而不「住」、未「有」「長住而不「行」、欲「益」無「所」益、欲「為」無「所」為。宜「作」舟航、無「久」住「此」。師即「礼」辞、復返「石頭」。

とある南嶽下の馬祖道一(馬大師、大寂禅師、七〇九—七八八)と薬山惟儼による「薬山皮膚脱落」の古則を踏まえてなされていよう。また「從教永劫沈淪去、不「入」「如来解脱門」」の語句も、『景德伝燈録』巻五「吉州清原山行思禅師」の章で、青原下の石頭希遷が六祖下の南嶽懷讓(大慧禅師、六七七—七四四)に答えた「寧可「永劫受」「沈淪」、不「下」從「諸聖」求「解脱」」の語句を踏まえた表現であらう。

(47) 元叟行端は「跋「大慧・癡絶・天目・偃谿・晦巖・断橋・象潭・叔凱諸老墨跡」」の題跋で「偃谿・晦巖・断橋、同時に鼎立し、今、皆な児孫有りて雄席に拠る」と述べている。ここにいう晦巖が大光のことを指すのであれば、大光には法門を嗣統して大刹に住持した門人が存したことになる。ただし、晦巖が天台宗の晦巖法照のことを指すのであれば、法照には門下の教僧が多く存したことから、児孫が雄席に住持したと記されても不自然ではない。

(48) 夢窓派の義堂周信(空華道人、一三二五—一三八八)が編集した『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻中「哀悼」には、
天童晦岩末上。 虚舟。

恩怨重々分未「分」、再来不「見」旧時人、娟々宿鷺亭前月、忍「照」西風吹「白蘋」。

とあり、同じく『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一〇「哀悼」にも、

天童梅岩（岩下一本有「禾上」二字）。虚舟。

思怨重々分未_レ分、再来不_レ見_レ旧時人、娟々宿鷺亭前月、忍_レ照_三西風吹_二白蘋_一。

と記されている。『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』では題名が「天童梅岩」とあり、また「思怨」が「思怨」となっているが、そのほかは一致している。

(49) ちなみに虚舟普度の『虚舟和尚語録』『真讚』には「仏光法師」と題して、

蕩蕩慈風彌_三宇宙_一、滔滔辯瀉四河清、毘盧海印全身佩、香擁_三優曇滿_二帝城_一。

という祖贊が存し、普度が天台僧の晦巖法照の頂相に贊を寄せていることが知られる。この真贊では普度は法照を晦巖とは称せず、法師号の仏光法師を用いているから、普度にとつて「晦巖」とはいえは参師の光大を指していたと見られる。

(50) 『鄞県志』巻五九「金石上」に「天童寺別山智禪師塔銘、在_三天童中峯庵_一」として「慶元府太古名山天童景德禪寺第四十代別山智禪師塔銘」の全文が収められており、そこに別山祖智の墓塔について「遂塔_三全身於中峯密庵之右_一」と記されている。また祖智が天童山の第四〇世であったことが判明し、『扶桑五山記』一「天童住持位次」と合致していることが知られる。

(51) ちなみに『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上「祖塔」には、

枯禪塔（在_三靈隱_一）。月江。

青鳳山前合澗辺、屋簷頭上更無_レ天、而今剗地思量著、細壁春風作_二紙錢_一。

という偈頌が存するから、自鏡の塔は天童山のみでなく杭州の靈隱寺にも立てられたらしいことが知られる。

(52) 辻俊和「天童寺・阿育王寺・保国寺の石像物」の「宋晦岩光禪師舍利塔」無縫塔の箇所を示すならば、つぎのごとくである。先の「宋密庵傑禪師之塔」と並んで置かれた無縫塔であり、塔身は梅園石製で他の部分は凝灰岩質の石材を用いている。

基礎は「宋密庵傑禪師之塔」と同形式のものであり、最上段は薄い板状の台座とし、その下も表面に丸みをもたせて、左右対称に中央に植物の葉とそこから左右に伸びる蔓を刻み、空間には雲文を刻出する。各隅六方には垂飾のついた突起状の彫刻を刻み出している。その下方は各隅のみ猫足状の脚を造り出し、再下段は六角形の板状の台である。

竿は六角柱状に造るが各側面は無文であり、高さ四〇・八cm、幅は下端が五七・〇cm、上端が五六・三cm、各面幅は二八・三cmを測る。

次に、竿の上には中台と請花が乗ったと思われるが現在はない。

塔身は丸みをもつ卵形であるが、先の「宋密庵傑禪師之塔」に比べて塔頂部の弧状はやや尖り気味になり、最大径は塔身中央付近になる。また、塔身正面には荷葉蓮台碑形を薄肉彫りし、「宋晦岩光禪師舍利塔」と陰刻する。塔身部の形態からみると、先の「宋密庵傑禪師之塔」と本塔は同じ宋代に造立されたものと思われるが、無縫塔としては若干時代差を感じる。なお、晦岩光禪師については、『正法眼藏』に、道元が渡宋中に禪師と接見したこと等を記している。塔身は高さ五三・七cm、最大径は高さ二二・〇cmのところまで五二・四cm、下端の径は四七・六cmである。荷葉蓮台碑形の部分は長さ三五・〇cm、下の連座幅六一cm、上の屋蓋部幅は一〇・五cm、牌部幅は五・八cmを測る。

(53) 『北磬文集』巻九「疏」の「印老住天童」の最初の「州府疏」には、

有_レ法付_二国王大臣、金湯惟固、無_レ法付_二空王真子、衣鉢親伝、斯文欲_レ並_二皇明、王度敢忘_二陰翊。某人、身藏_二北斗、口吸_二西江、
膝公三代後、跨_レ竈衝_レ樓、肯堂一着先、摩頂放_レ踵。康莊失_レ步、指_レ陳自己珍琦、死水觀_レ瀾。又属_二它家風月。与_二其輩較、
曷若_二山林。指_二碧巖石玲瓏、達_二四聰於丹扈、觀_二黃河水清淺、導_二万派於銀潢。〈右州府疏〉。

と記されており、文中にある肯堂とは、おそらく大慧派の卍庵道顔（一〇九四—一一六四）の法を嗣いだ肯堂彦充のことと見られ、松巖印は大慧宗杲—卍庵道顔—肯堂彦充と嗣承する彦充とも何らかの関わりが存したものである。『諸山疏』には、

会_二仏法一人、何啻稻麻竹葦。無_二陰陽一地、不_レ関_二水旱豊凶。幾箇知帰、其誰踏著。某人、浮華消尽、眞実独存、一点無_レ私、
十年起_レ廢。春去桃花片片、緑繞_二庭除、夜開月觀沈沈、翠磨_二星漢。孰謂_二平常是道、安知_二坐充平常。自憐計較俱非、不_レ
鮮巧生_二計較。出_二乎其類、少慰_二同盟。豈無_二它人。願觀_二盛作。〈右諸山疏〉。

と記されている。『諸山疏』の文中に「十年、廢を起こす」とあるのは、おそらく松巖印が一〇年間にわたって中天竺寺に住持し、その間に伽藍を一新した意であろう。これら一連の疏文はいずれも居簡によって製作されたものということになる。ただ、「山門疏」には松巖印に関する嗣承や伝記的な記載が存しているが、「州府疏」や「諸山疏」には松巖印の嗣承に関わるような具体的な記述は見られない。また『扶桑五山記』—「天童住持位次」—によれば、松巖印の後席を継いで天童山に住持したのは「雲臥榮禪師」という禪者であるが、ここにいう雲臥□榮とは『羅湖野録』四卷や『雲臥紀譚』二卷を著した大慧派の雲臥曉堂（仲温）とは時期的にも系統的にも別人でなければならず、如何なる禪者であったのか嗣承なども定かでない。さらに雲臥榮の後席を継いで嘉熙二年（一二三二）に天童山に入寺したのが曹源派の癡絶道冲にほかならない。

【笑庵了悟・晦巖大光の関連系譜】

〔臨濟宗黃龍派〕

黃龍慧南—晦堂祖心—無示介謀—心開曇貫—雪庵從瑾—虛庵懷敏—明庵采西—仏樹房明全

啜庵宗鑑—万年元肅

真淨克文—湛堂文準—典牛天游—塗毒智策—古月道融

松庵□印

〔臨濟宗楊岐派〕

五祖法演—仏鑑慧勲—仏燈守珣

仏眼清遠—雪堂道行—晦庵慧光—蒙庵元聡—我禪房俊仍

圓悟克勤—虎丘紹隆—応庵曇華—密庵咸傑〔虎丘派〕

大慧宗杲〔大慧派〕

蓬庵端裕—無庵法全

水庵師一—息庵達観—淳庵善淨—嘯巖文蔚

此庵景元—或庵師体—癡鈍智頴—大夢徳因

簡堂行機

密印安民—別峰宝印—如庵恵崇

石橋可宣—退庵道奇—高原祖泉

南堂元静—石頭自回—蓬庵徳会—壞納大璉—六巖□殺

〔虎丘派〕
密庵咸傑

笑庵了悟—晦巖大光—思斉

曹源道生—癡絶道冲—東福円爾

石田法薫—別山祖智

破庵祖先—無準師範—断橋妙倫

晦谷□彰

枯禪自鏡—愚谷元智—絶岸可湘

無学祖元

松坡宗慈

松源崇嶽—無得覚通—虚舟普度

石巖希璉

無明慧性—蘭溪道隆

蒺藜正曇

大歇仲謙—覚庵夢真—沢山弑威

不庵了悟—象潭濡泳

天目文礼

晦巖□暉—宝日

掩室善開—石溪心月—大休正念

運庵普巖—虚堂智愚—南浦紹明

諾庵師肇—石帆惟衍—西澗子曇

谷源至道

〔曹洞宗〕

丹霞子淳—真歇清了—大休宗珙—足庵智鑑—長翁如淨—無外義遠

宏智正覺—自得慧暉—明極慧祚—東谷妙光—永平道元—孤雲懷奘—寶慶寂円

海印德雲—雪屋正韶

〔天台宗〕

慈辯從諫—車溪挾卿—竹庵可觀—北峰宗印—晦巖法照

〔大慧派〕

大慧宗杲

懶庵鼎需—木庵安永—晦庵悟明

已庵道顔—肯堂彦充

無等有才—孤雲道樞

拙庵德光—無際了派—雪窓祖日

浙翁如琰—偃溪広闢—枯崖円悟

少林妙崧

鉄牛心印

妙峰之善—藏叟善珍—元叟行端

北磻居簡—物初大觀

遯庵宗演—石堂法明

無用浄全—笑翁妙堪—無文道璨

盤山思卓